

---

# 虹色の明日へ

Yu-Zo-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虹色の明日へ

### 【NZコード】

N5078A

### 【作者名】

YU-ZO-

### 【あらすじ】

金常時隼人・15歳は霊能力を持つた高校一年生。心優しい彼は、しかしその見た目不良な容姿と桁外れに強い腕つ節から、周りから恐れられる存在だった。転校をきっかけに、彼は人生を一からやり直すことを決意するのだが、転校先でもトラブルを起こしてしまった。そんな時、彼は一人の美少女に一目ぼれをする。そして、その美少女は、なんと彼に弟子入りを哀願するいじめられっこ兼クラスメイトの妹だった。そして彼は、何とか彼女の恋人になれる日を夢見るのだが、シャイな性格が災いし恋は発展しない。しかし、美少女の

背負う過去と、隼人の靈能力が、やがて一人の距離を近づけていく。  
果たして、彼は恋を成就することが出来るのだろうか。

「いや、もういい加減俺で金儲けするのはやめひよ  
「失礼ね！ 誰があんたで金儲けしてりつてのよー！」

「いや。あんただ。あんた……。

「なに？ なんか文句でもあんの？」

「いや……」

「そう。じゃあ、今週の日曜日だからよろしくね。あ、言つとくけどすっぽかしたらぶつ殺すからね」

語尾にハートマークのつきそつと穩やかな笑顔とは裏腹の春姉の言葉に、俺は背筋に冷たいものを感じながら、部屋を出していく春姉の後ろ姿を見送った。

その笑顔だけ取れば可愛くて清楚な女の子であり、放たれた捨てゼリふも可愛いものだと微笑をもつて受け流せそうなものだが、うちの姉の場合はそうはいかない。

金常時春香。18歳。全国高等学校空手道選手権大会二年連続優勝。世界空手道選手権大会3位入賞という恐ろしい肩書きを持つ二つ年上の俺の姉だ。清廉可憐、純情無垢な天使のような女の子としてはまさに理想的な容姿をした姉だが、俺は知っている。

その小さくてかわいらしい手が、コンクリートブロック一枚を軽々と粉碎してしまう凶器だということを。その誰もが見とれてしまった柔らかそうで文句のつけようのない綺麗な脚が、木製バット3本をまとめてへし折ってしまう凶器だということを。

姉の言葉がただの脅し文句ではないということを……俺はよく知っている。

俺は大きく息を吐いて、部屋の端っこに置かれたパイプベッドの上に寝転がった。

春姉の頼みとは、俺のある特殊能力をえさにして金儲けに利用することだ。俺のある特殊能力……。その詳細は、まだ伏せさ

せてほしい。つてか、話したくなえ！

ちくしょう！ 今の俺は、春姉のくだらない金儲けに付き合つてる余裕なんてないんだ！ この意地汚い金の亡者め！ そんなに金が欲しいんなら、いつそ銀行強盗でもなんでもやつちまえつてんだ！ いつつも俺が言いなりになつてると思つたら大間違いだからな！ 分かつたか、この二重人格女！

ああ……。心の中だけでなく、本人を前にして堂々と叫んでみたい。その2秒後に天使のような笑顔のもと殺人が行われるにしても、一度でいいから（つてか、2度目はないからな、多分）本人に訴えてみたい。

ちくしょう……。どうして、俺だけがこんなに不幸なんだ。世の中絶対間違つてる！

第一話・金常時春香（後書き）

## 第2話・金常時隼人（前編）

俺の名前さかなじょうは金常時隼人かなじょうじゅんじん。15歳。どこにでもいる、平々凡々な高校1年生だ。

「「」るあ！ てめえ、誰だよ。文句ふんくでもあんのか、殺すぞ「」るあ！」

そう、俺はどこにでもいる平々凡々な高校一年生、のはずなのだが。

「「」るあ！ てめえ、なんか文句ふんくでもあんのかつてんだよ、「」るあ！」

さつきから、ごるあ、ごるあと新種の珍獸の鳴き声みたいな奇声をあげている、スキンヘッドの男の顔が、なぜか俺の眼前に迫ついた。顔中にピアスをちりばめたその様相は、新種の珍獸といつよりも見たこともない宇宙人みたいだ。もつとも、宇宙人をこの目で直におがんだことはないが、まあ、そんなことはこの際どうでもいい。問題は、なぜ平々凡々な高校一年生であるはずの俺が、柄の悪い不良連中に囮まれているのかということだ。

「「」るあ！ てめえ、黙つて突つ立つてないで、なんとか言ってみろよ！ 「」るあ！」

俺は仕方なく道路の真ん中に転がつている花瓶を指さした。1週間前、この通りの少し先にある交差点で、交通事故に遭い亡くなつた子供への供え物だ。なんの花かは知らないが、小さな花瓶に挿された綺麗な一輪の花を昨日目にしていたので知つていて。

散歩中、たまたま私は不良ですとアピールした身なりをした学生3人が、供え物の花瓶で楽しそうにはしゃぎながらサッカーをしている様子を、うわ……馬鹿丸だし……とか、若干引きながらいつも傍観していただけなのだが、不運にも、はしゃぎつつもさりげなくこっちに顔を向けてきた珍獸スキンヘッド（たった今、命名）と目が合つてしまつたがために、俺は今こうしてわけのわからない

因縁をつけられているというわけだ。

「そこに転がってる花瓶……」

俺は黙つてないで何とか言えというリクエストに、渋々答えた。

「ああ？　もしかして、お前、俺らがその花瓶でサッカーしてたとでも言いたいのかよ」

「おいおい。冗談じゃねえよ。俺らがやつたって証拠でもんのかよ。ねえ、ちー君」

「そうだよ、ごるあ！　てめえ、妙な言いがかりつけてつどぶつ殺すぞ、ごるあ！」

……いや、証拠もなにも、お前等今その花瓶で楽しそうにサッカーしてたじゅん。明らかに俺と目が合ひうままで楽しそうにサッカーしてたじゅん。ていうか、今こいつ

「サッカーしてたとでも言いたいのかよ」

つて言つたし。もし、この状況だけを見た人間ならいきなりその花瓶でサッカーしてたとは思わないよな。多分、けり倒したぐらいにしか思わないよ。お前、サッカーしてるところ見られたから

「サッカーしてたとでも言いたいのかよ」

つて言つたる。　とか思いながらも、俺がそこをツツコむことはない。別に、ツツコみベタとかそういうことじやなくて、ただ、俺が無口な上に口下手な人間であり、人並みな平和主義なだけだ。

俺はわけのわからぬ因縁をつけてくる不良3人を相手にせず、道路に転がっているひび割れた花瓶を道路脇にそつと戻してやつた。

「てめえ、なにシカトぶつこいてんだよ！　ごるあ！」

「そうだよ。勝手な因縁つけてといてそれはないんじやない？」

「君、世の中なめてるでしょ」

やめてくれ。それ以上俺に近づかないでくれ。俺は別にお前等と争うつもりはないんだ。そう思いながらも、作り笑いひとつまくできないおれは、仮頂面で

「別に……」

と呴く」としかできない。もちろん

「別に」

お前等と争うつもりはないんだ、といつ意味をこめてのものだが、今まで誰一人として俺の台詞の中身を器用に理解してくれた人間などいたためしがない。

「聞いた？ 別に、だつて」

「あーあ。完全にけんか売られてるよ」

「いい度胸してんじやねえか、こるあー」

ああ……。やっぱ、こうなんのかよ。なんで、いつもいつも俺だけこんな目に……。俺の他にもお前等のこと見てた人間いっぱいいたじゃん。ちょっと田つきが悪くて、ちょっと体が大きいからつてなんで俺ばっかり……。

「うるあ！ 天国か地獄、どっちか好きなほうにこいやあー！」

「……」

チンケな台詞と一緒に珍獣スキンヘッドの右拳が俺の左頬をめがけてうなりをあげた。ここで問題を起こしたくない俺は、ぐつと歯を食いしばって受け身の態勢をとる。が、眼前に珍獣スキンヘッドの拳が迫つた瞬間、俺の脳裏に刻まれたある恐ろしい記憶が目を覚ました。

天使のような笑顔のもと繰り出される、恐ろしく強烈な正拳突き。思いやりという言葉の意味をまるで理解していない、殺意の乗り移つた高速の上段蹴り。意識もうろうとして倒れ込んだ最後にうつすらとした視界の中に見た、情け容赦のないとどめの下段突き。

世にも恐ろしい記憶が、俺の防衛本能を刺激する。コノマ数秒後、俺の意思とは関係なく俺の右拳は珍獣スキンヘッドの顔面にめり込んでいた。

「あ……」

ちょうどクロスカウンターの形で入つた俺の拳は、珍獣スキンヘッドの鼻骨と前歯2本を見事にへし折つて、珍獣スキンヘッドを吹き飛ばしていた。電柱柱に叩きつけられた珍獣スキンヘッドが

「きやん！」

と子犬のような高い鳴き声をあげて、地面に倒れ込む。

「きやああ！」

「いやあ…」

「人殺し…」

「警察呼べ！ 警察！」

ピクリとも動かず地面にひれ伏す珍獣スキンヘッド。

その傍らに立ち尽くす俺。

周囲から聞こえてくる悲鳴に怒号。

たちまち、逃げまどう人々と騒ぎを聞きつけた野次馬たちで、俺の半径15メートル以内の空間は、パニックに陥ってしまった。

また、やってしまった……。いつの間にか、春姉の恐怖が刷り込まれた俺の体は、熱いものに手を触れると思わず手を離す動作を無意識にとるがごとく、身の危険を感じると反射的に自分の身を守るようになってしまっているのだ。おまけに6歳の頃から約8年間、空手で鍛え込まれた俺の体は、無意識のうちにもその力を発揮してしまつ。そのせいで、今まで俺がけちらした不良の数は50人は軽く越え、周囲からは

「バーサーカー」

とか

「キラーマシーン」

とか陰で呼ばれ続けてきたのだ。そんなもの、相手が勝手に襲いかかってくる以上、自分はどうしようもないではないか！ 誰も好き好んで不良を半殺しにしてるわけじゃないんだ！

いつの間にかできあがった人垣の中心で、俺は無性にやりきれなくなつてぶるぶると肩を震わせた。周囲から聞こえてくる

「うわあ、なんかあいつ震えだしたぞ」

とか

「気持ち悪う」

とか

「あの田やばいよ」

とかいいうせりやき声が、俺の涙腺を容赦なく刺激する。

「ちくしょう！ ってか、明らかにこれは正当防衛だろ？」「なんだよ！

そう叫んで泣きながら人垣をかき分けて駆け出すよくなかわいい真似ができればいいのだが、維持とプライドが邪魔をしてそれさえもできない。もつとも、いつの間にか珍獸スキンヘッドの連れ2人はいなくなっていたので、俺の無実を証明する術はその時点で消滅している。俺に残された道はもはや仏頂面した悪役として、悠然とこの場を去るのみだった。

「う、うわ、こっち来るぞ！」

「に、逃げろ、殺される！」

人垣をかき分ける必要もなく、野次馬は一目散に俺のもとから逃げ去っていく。そして、1人残らず逃げ去ったそこに存在するのは、ピクリとも動かない珍獸スキンヘッドだけだった。

誰も見ていないところで、俺はホロリと伝い落ちる一粒の涙を、ゴシゴシと拭つた。道路の端っこに踏みつけられた一輪の花は、まるで今の俺そのものだ。

俺は優しく一輪の花を拾い上げて花瓶にのこしてやると、悠然とその場を後にした。

春姉が俺を使っての金儲けを頼んできたのは、その後家に帰つてすぐのことだった。

先日この町に引っ越してきて、右も左も分からぬがとりあえず学校までの道のりを覚えよう！ と少しへキドキワクワクの探検気分を始まって5分で無惨に、おまけに理不尽に打ち砕かれた弟の切なすぎる心境を知りもしないで、あの暴力二重人格女は……！ ふ……まあ、いい。この際そんなことはもう今の俺にとつてはほんの些細なことに過ぎない。まあ、俺の心の叫びを本人にお知らせしたいという自殺行為に及ぶ自分が頭をよぎつたりもしたが、冷静になりさえすればもうこっちのものだ。

思い返せば、長い道のりだった……。

つぶらな瞳の可愛らしい少年時代。その少年の前に広がつた道が、苦難と苦痛とに彩られた並の修業僧なら裸足で逃げ出すほどの苦行の道であることを一体誰が想像できただろうか。

小学生時代。

極度のあがり症と口べた、無口な性格が災いしていじめの標的にされてしまった、あの頃……。

当時から周りより少し体格のよかつた俺だが、その心優しさから悪質な嫌がらせをしてくる連中を

「ふざけんな、コラア！ てめえら、そんな俺にぶつ殺されてえのか、ああ？」

なんて言つて、ぶちのめすなんてことはできるはずがなかつた。だが、そのいじめは始まつてたつた三日で幕を閉じることになる。どこからか、俺がいじめられているという情報をかぎつけた春姉が、いじめの実行犯八人を容赦なく叩きのめしてしまつた（文字通り）のだ。

当時からもう周りの大人も目を見張るほどの空手の才能を見せてい

た春姉の実力は、ルールなしの喧嘩にこそ、その真価が發揮された。相手が年下だったとはいえ、男子八人を相手に無傷で勝利を飾った春姉の武勇伝は、今でもその小学校で語り継がれていことだろう。春姉も、小学生の頃は俺にとつては弟想いの優しい自慢の姉だったのだ。が、その強すぎる姉を持つてしまつたがために、俺は悪ガキだけでなく普通のクラスメイトたちからも恐れられる存在になってしまった……。そして、だめ押しが

「あんた、弱いからなめられんのよ。でも、安心しなさい。私があんたのこと強くしたげるから」

の春姉の言葉だ。

俺が空手を習い始め、しかも伝説として祭り上げられている強さを持つ姉に鍛え込まれているという噂は、あつと言う間に学校中に広まってしまった。そして、とうとう俺に近づく人間は誰一人としていなくなってしまった。

もちろん、そんな状況の中で友達なんてできるはずもなかつた。本来、控え目な性格の俺が冷たい目を向けてくる人間に自ら話しかけるなんて真似ができるはずもない。クラスの席替え、様々な行事ごとのグループ決め、果ては毎日ある給食での自由席……。そのたびに俺はつまはじきに。だめだ。思い出しだけでも、胃の辺りがキリキリと痛くなつてきそうだ……。

中学生時代なんて、それよりもさらに悲惨だった。

「新入生の中に、百戦錬磨の鬼神のごとき強さを誇る怪物がいる」という、一人歩きした噂に踊らされた顔の怖い先輩方が入学間もない新入生の教室に、しかも授業中にも関わらず乗り込んできた。

「こらあ！ こんなに金常時隼人つて奴いるかあ！」

鬼のように怖い顔をした、明らかに喧嘩上等の先輩方がみんなお揃いの短ランにダボダボのズボンというファッショントをして、ズカズカと教壇の前に並んで怒鳴り声をあげた。その瞬間、クラス全員の視線が俺に集中した。おまけに、席の間をぬつて歩きながら教科書を片手に朗読をしていた教師までが、離れた場所から俺に無表情

な顔を向けているではないか！

「お前か、こらあ！　ちょっと面かせや！」

こうして、俺はクラスメイトにも教師にも見捨てられ、怖い先輩方に人気のない体育館裏に連れ込まれた。そして、その10分後、1人残らず氣を失つて地面をなめている先輩方は駆けつけた教師の手によつて保護され、1人歩きした噂に裏付けをしてしまつた俺の辿つた道は、もう説明する必要はないだろう。……。

だが、そんな悲惨な俺の人生もここまでだ！　なぜなら、そう！

引っ越しだ！　先日、俺は15年慣れ親しんだ町を捨ててこの町に引っ越してきた、つまり！　誰も、俺のことなんて知らない！

人生やり直せるということだ！

親の仕事の都合で、引っ越しをしなければならない。

その朗報を耳にしたとき、俺は歓喜に打ち震えた。

嬉しさのあまり思わずその場にいた春姉に抱きついたりして、危うく命を失いかけもした。

ふ、ふふふ……。

ここからだ。ここから、俺の人生は輝きだす。これから、夢にまで見た楽しい学生ライフの始まりだ。なんせ、転校生がクラスの人気者に、なんてパターンはわりとよくある話だし、うまくいけば俺もつてか！

よつしゃあ！　新しい学校では数え切れないほど友達作るんだ！

休憩時間には絶えず仲のいい友達と談笑して、意味もなくつき合つたり、ふざけ合つたりするんだ！　部活なんてのにも入つて、仲間と青春の汗を共に流したり、できればその……彼女なんてのも作つてみたりして！

待つてろよ、青春！　まだ見ぬ仲間たち！俺の人生、ここからが本番だ！

## 第4話・登校初日ー（その一）

ついに、初登校の日がやつてきた。俺は昨日から徹夜で作った自己紹介の挨拶文を書いた紙に目を通して、最後のおさらいをする。

「どうも初めまして。金常時隼人です。まだ、こっちに引っ越ししてきて間もなくていろいろ勝手が分からんんだけど、よろしくね。あ、僕のことは金ちゃんって呼んでください。前いた学校じゃ、みんなからそう呼ぶから（うそ）。でも、あらかじめ断つておくけど欽ちゃんの物まねはできないよ。ハハハ！」

「こりでスマイルだ！」と口の端を持ち上げたところ

「あんた、さつきからなにぶつぶつ言つててんのよ」

と春姉の声が背後から響いてきた。驚いて振り返ると、閉め忘れていたドアの前に、冷めた目をした春姉が立っていた。

「は、春姉……」

「なに、1人でぶつぶつ言つてんのよ、あんた」

「は、春姉には関係ないだろ」

「ま、そうね。せいぜい、ポカしないようにがんばんなさい。どうせ、無駄だらうけど」「……」

……お見通しつてわけか。

「そんなことより、昨日頼んだこと忘れんじゃないわよ」

「……分かってるよ。用がないなら早く出てつてくれよ」

「はいはい」

春姉はさつさと俺の部屋を出で、リビングへと入つていった。俺は、春姉の後ろ姿をほんの少しの間だけにらんでから、ドアを勢いよく閉めた。そんなことよりだあ？　ふざけんじゃねえ！　なにも知らねえくせに勝手なこと言つてんじゃねえ！　この紙切れに書かれたことうまく言えるかどうかが、今後の俺の生き方を大きく左右するんだよ！

俺は、頭にきて外に決して声が漏れないように、それでいてストレ

スが解消できる程度に声を大きくして言つてやつた。

「隼人。母さんがさつさと朝ご飯食べろつて

」

「この一重人格女！　お前の頼みなんて誰が聞いてやるかよ！

バーカ！」

突然開かれたドア。そこかららのぞく春姉の顔。部屋の中に反響する俺の怒鳴り声。俺は啞然として、部屋に入つてくる春姉の可愛らしい笑顔を見守りつつ、後ずさつた。

「……ねえ。一重人格女つて……私のこと?」

「ち、ちが……」

後ろ手にドアを閉めて、春姉はゆっくり俺に迫つてきた。

バタン！

ドアの閉まるすさまじい音と一緒に、俺の悲惨な一日は幕を開けたのだった。

不慮のアクシデントに見舞われた俺は、それでも何とか生き延びて、無事（？）新たな高校のクラスメイトたちの前に立っていた。どうやら、春姉は実の弟に

「ボコボコに腫れあがった顔で自己紹介をさせるのはひょっとかわいそつかな」

とでも思ったのだろう。

そんなあるかないかの思いやりのおかげで、俺は腹だけを集中的に痛めつけられ、朝ご飯を食べるよう呼びに来た姉に朝ご飯を食べられなくされたのだった。そんなこんなで、俺にとつて一世一代の大勝負は理不尽にも、最悪のコンティイションで望まざる終えなくされてしまった。が、そんな不幸も忘れてしまつほど、俺は今感動していた。

自己紹介のため教壇の前に立つ転校生。そして、新しい仲間に向けられる興味と歓迎の込められたまなざし。そう、まさに夢にまで見たシチュエーションのまつただ中に俺は立っているのだ。

ああ……。人からこんな目で見られるのは初めてだ。陰口をたたかれる以外でひそひそ話をされるのも初めてだ。あ、おまけに

「けつこう、イケてんじやない？」

なんて声まで聞こえてきた。おお！　あそこの女子、俺と目が合うとウインクしてきたぞ！　「、これはもう　ムフフ……つてか！」

「じゃあ、金常時君。簡単に自己紹介して」

担任の黒縁眼鏡をかけた冴えない男教師は、俺の簡単な紹介を済ますと教壇の前を俺に明け渡した。

俺は堂々と教壇の前に立ち、改めてクラスメイトたちの視線を一身に受けながら昨日徹夜で暗記した台詞を言葉にしようとした。が、カラカラにのどが渇いてしまって、うまく声を出すことができなか

つた。おまけに、いつの間にか足がガクガク震えだしてきたかと思うと、自分が今なにしていてこれからどうすればいいのかということさえも、突如として分からなくなってしまった。

そう、俺は本来極度のあがり症であり、口ベタ、おまけに控えめな性格の持ち主だったのだ。すっかり舞い上がって忘れてしまったが、冷静に考えてみればそんな俺がこんな大勢の前で堂々としゃべるなんてできるわけがない。ましてや、

「よろしくね、ははは！」

なんてこと絶対無理だ。ってか顔固まつてんのにどうやって笑えつてんだ。

「どうしたの？」 金常時君

担任の教師が怪訝な顔をして俺の顔をうかがう。クラスメイトたちがどうしたのかとざわめきだす。マ、マズイ……！ 早く何か言わないと、このままじゃ夢に描いた俺の楽しい学生ライフが本当に夢のままで終わってしまう！

俺は意を決して、声を絞り出した。この際、もう笑顔も台詞もどうだつていい。とにかく一刻も早くこの窮地から脱出しなければ、俺の人生お先真っ暗になつちまう！

「……よろしく」

しかめつ面から放たれた短すぎる自己紹介の台詞に、返事を返そうとするクラスメイトは誰一人としていなかつた。おそらく、無愛想な一言だけでクラスメイトたちは俺がどういう人間であるかを理解したのだろう。多分みんな、俺の一言を

「夜路死苦」

と受け取つてゐる。

確かに、こういう場で

「よろしく」

としか言えないような人間は、シャイで恥ずかしがり屋というかわいい性格の持ち主か、粗暴な性格の持ち主ぐらいだが 俺は決して後者に当たる人間ではないのだ。なのに、この見慣れた反応

は何だ？　さつきまでの歓迎ムードが一転して険悪なムードに押し包まれているのはどういうことだ？

「……え、えー、じゃあ、金常時君は席について。君の席は、桂

木君の隣だから

空いた席を見つけて、俺は隣の席の女子生徒に目をやつた。その女子生徒は、まさにさつき俺にワインクをしてきた女子生徒だった。俺は、かすかな淡い期待を胸に、彼女の目をじっと見つめた。が、ワインクどころか彼女は俺と目が合うと気まずそうに目を伏せてしまったではないか。

俺の背中を冷たい汗が流れ落ちていく。俺の夢に描いた楽しい学生ライフは、始まって5分もせずにもうくも崩れちゃうとしていた。

## 第6話・登校初日ー（その3）

もしこの世界に神が存在するのなら、なぜ神は俺にだけこんな過酷な試練を与えたりするのだろう？　などと現実逃避に神を持ち出しながら、俺は屋上の片隅に寝つ転がつて視界いっぱいに広がる果てしなく青い空をぼんやりと眺めた。

終わった……。俺の夢に描いた学生ライフは、始まりもせずに終わった……。

まだ、あの自己紹介までならよかつた。あの時点までなら、クラスメイトの俺に対する恐怖も、慣れてしまえば

「なーんだ」

となつてしまふ程度のものだつたのだ。

そう。長くつき合つてくれれば、誰だつて俺がむやみやたらと人を傷つける粗暴な人間では決してないことを分かつてくれるはずだ。それなのに、何の因果かいつも俺にはそのつき合いを元から絶つてくるトラブルがタイミング悪くふりかかつてくる……。俺は、もう忘れようと自分に言い聞かせながら、ぎゅっと瞼を閉じた。だが、あの忌まわしい記憶は瞼の裏にまで張り付いて俺を苦しめるのだった。

自己紹介を外してしまつたせいで、昼休みに入つても俺に話しかけてくる人間は未だに1人としていなかつた。このままではまずい。そう思いながらも、自分から見ず知らずの人間に話しかけるという行為に及ぶことのできない俺は、人の輪から外れてひたすら誰かが優しく

「ねえ、金常時君」

なんて声をかけてくれるのを待っていた。教室の中は、いくつかのグループに分かれて、みんな楽しそうに仲間と談笑しながら昼食をとっていた。俺は机の中には持参した弁当を隠しながら、そのときをひたすら待ち続けた。

「ねえ、金常時君。よかつたらこっち来て一緒に弁当たべない?」「そのときに備えて準備は万端だ!」

仲間と談笑しながら弁当を食べる。そんなことが、俺の人生の中に一度としてあつただろ?「いや、ない。ありはしない。だが、そもそももう今日までだ。俺は、今日から生まれ変わるのだ……!」

と密かに握り拳を握っていると、突然背後から

「ねえ、金常時君」

と声が響いてきた。俺は幸福のあまりピクリとも体を動かせずに、声の主の次の言葉を待つた。しかし、待ちに待つた次の言葉は、俺のまだ見ぬ楽しい学生ライフを粉々に打ち碎くカウンタダウンの始まりだった。

「君つて金常時君つていうんだね

「俺たちのこと覚えてる?」

「忘れたとは言わせねえぞ、ごるあ!」

聞き覚えのある、新種の珍獣の鳴き声のよくな奇声を聞いて、俺は旋律を覚えた。声の主は俺の目の前に回り込んできて、その姿をあらわにした。

間違いない、昨日俺に訳の分からぬ因縁をつけてきた不良三人組だつた。

「お、おい。あれつて三組の高橋たちじやん

「あいつら、停学解けたのかよ」

「それよりさ、あいつらと金常時知り合いみたいだぜ。やっぱ、金

常時つてやばい奴なのかな

クラスメイトの声が、俺を激しく動搖させた。

それにして、こいつらがまさか同じ学校の生徒だったとは……。

俺つて奴は、一体どこまで運のない人間なのだ……。

「『るあ！』 てめえ、昨日は不意打ちなんて汚ねえ真似しやがつてよお！」

「そりだよ。それでちー君、やられちゃつたんだよなあ

「ほんと、汚ねえ奴だぜ」

一通り、

「こいつは喧嘩に勝つためなら、不意打ちも平氣でする汚い奴」という汚名を俺に着せた不良三人組は、今度は思い出したように俺に詰め寄ってきた。もつとも、詰め寄ってきたのは例の珍獸スキンヘッドだけで、残りの2人は後ろに控えている。

「『るあ！』 昨日は不意打ちなんて汚ねえ真似にしてやられたけど、今日はそりだよなあ、『るあ！』

珍獸スキンヘッドは俺の前の席の机を蹴り倒して、俺の眼前に醜い顔を寄せてきた。たちまち、教室の中は険悪なムードに包まれた。しかし、鼻に取り付けられた固定具はとにかく、前歯2本が抜けたその顔はどう見ても間抜けにしか見えない。そして、その間抜け面した奴に俺の今後が左右されているかと思つと、言ひようのない情けなさとじょうもなさに俺の頭はクラクラした。

「おい、『るあ！』 てめえ、俺の舍弟になんなら許してやつてもいいぞ、『るあ！』

珍獸スキンヘッドはそう言つて、煙草臭い息を俺に吐きかけた。こいつの舍弟？ 「冗談じやない。そんなことになつたら、楽しい学生ライフどころか俺の周りには誰も人が寄りつかなくなるではないか。

「……断る」

「ああ？ 断るだと、『るあ！』

「てめえ、ちー君が下手に出てるからつて、つけあがるなよ

「痛い目見たいのかよ、『るあ！』

なるべく、相手の氣を逆立てないようこやんわりと断つたつもりだつたが、それもどうやら無駄に終わつたらしい。不良三人は、意味

もなく机や椅子に当たり散らし、クラスメイトに多大な迷惑をかけ始めた。そして、俺に手を出せない様子の珍獣スキンヘッドは、あらうことか無関係のしかもか弱い女子生徒に訳の分からぬ因縁をつけ始めたではないか。

「ごるあ！ てめえ、なにじろじろ見てんだよお！ 見せ物じやねえんだぞ、ごるあ！」

「ごめんなさい、と怯えた顔をして謝る女子生徒に、珍獣スキンヘッドはなおも訳の分からぬ因縁をつけたうえに、手持ちの因縁を使い尽くすと言葉につまつて、女子生徒の頬に容赦なく平手打ちをかました。

「思い知つたか、ごるあ！」

元来、正義感の強い俺がそのまま傍観し続けるなんてできるはずもなかつた。俺は席から立つと、なおも女子生徒をいびり続ける珍獣スキンヘッドの背後に立つて、その肩をつかんだ。

「ああ？ なんだ、ごるブッ！」

俺の右拳は珍獣スキンヘッドの顔面を貫き、またも鼻骨と前歯一本をへし折つて、珍獣スキンヘッドを数メートル吹き飛ばした。倒れる机。乱れ飛ぶ悲鳴。絶叫。たちまち、クラスメイトたちは教室の中から俺1人を置いて1人残らず逃げ出し、またしても俺は気を失つた珍獣スキンヘッドとともにその場に取り残されたのだった。

それから、情状酌量の余地もなく1週間の停学を言い渡され、午後の授業を残し俺は家へ強制送還された。

そして、停学が解けてからは、騒ぎを知った不良連中から毎日のように挑まれ、果ては、腕に覚えのある空手部の主将と名乗る人物までが、俺の極悪非道ぶりを見過ごせないと勝手に喧嘩をふつかけてくる始末だ。さらに悪いことに、その人は数日後に3年生として最後の公式試合を控えていたらしいのだが、俺にやられた傷が癒えず、涙を飲んで出場を辞退したらしい。

「聞いた？ 桂木先輩、金常時に怪我させられて最後の大会出られなかつたんだって」

「あいつ無差別に人襲いまくつてるって噂だぜ」

「目が合つた人間片つ端からやつちやうんじやね」

「あいつそのうち人殺しちゃうんじやね？」

引っ越して来て一ヶ月足らず。俺の夢に描いた楽しい学生ライフは、夢く泡のように消え去つてしまつた。そして、残つたのは学校に来るのはいいが、意味もなく恐れられるために屋上にしか居場所を見つけられないという、寂しくて切なすぎる現実だけだつた。

「ちくしょう……」

確かに、俺は身長180センチ、体重70キロと恵まれた体格をしている。

顔だつて細面ながら、鷹のように鋭い目をしており、穏やかな微笑みなどとは無縁のようなつくりだ。

さらに、口べタで自分の意志をうまく相手に伝えることはできないし、極度の照れ屋な性格から、感情を表情で表すことも苦手だ。これだけの悪条件がそろえれば、一見して粗暴な人間に見られるのは仕方のないことだとは思つ。

でも！　でもだ！　お前等の言つよう、俺が一度だつてむやみに人を傷つけたことがあるか？　確かに、身を守るためとはい、数多くの不良たちをけちらしてきた。

でも、それは俺が自ら望んでそうしているわけではないのだ。なるべく穩便に済ませようとする俺の気遣いを無視して、不良どもの方から一方的に手を出してくるのだ。

迎え撃つほかしょうがないではないか。

第一、俺に粗暴さがあるにしても、いつだつてその粗暴さは正義感という方面でのみ發揮されている。

そう、俺はサッカーに使われている供え物の花瓶を元に戻して、理不尽に絡まれている女子生徒を助けてあげただけじゃないか。それなのに、どうしてこうなつちまつんだ……？誰も俺の中身を見ようとしない。分かろうともしてくれない。見てくれだけで勝手な想像を膨らませて、知つたような顔をして俺を遠ざける。

どうして、俺だけがこんな目に遭わなければならんのだ……。

「なんで、俺だけ……」

ポツリと呴いてみると、ますます虚しさがこみ上げてくる。いつのこと、ここから飛び降りて楽になつてしまおうか。穏やかな青一色の空を眺めながら、軽く自殺願望にとらわれかけたとき

「「」ぬあ！」

と、どこから突然怒鳴り声が響いてきた。自殺に向かつていた俺の意識は、自然とその怒鳴り声に引き寄せられた。それは、神様が俺の自殺を止めるために与えてくれた幻聴というプレゼントだったのかもしれないが、俺はすぐに思い直して身を起こした。

今度は複数の怒鳴り声が聞こえたからだ。

屋上からは校内のほとんどを見渡すことができる。

怒鳴り声の元を辿つてみると、老朽化が進み今は使われなくなった校舎の裏で、複数の不良たちが1人の男子生徒を取り囲んでなにやら楽しそうに暴行を加えているではないか。しかも、その不良たちとこうのが俺の中のもう2度と顔も見たたくない人間ランキングベス

ト5に堂々に入る、あの珍獣スキンヘッドとその連れ2人と判明した瞬間、俺の気分はブルーゾーンを越えて、憂鬱の渦の中へ放り込まれた。

一通り気の弱そうな男子生徒を痛めつけ終えた珍獣スキンヘッドたちは、彼の財布から有り金すべてを奪い取ると

「これだけかよ、おい。しけてんなあ。次会うときは10万用意しどけよ」

などと無茶な要求をしておいて、その場を去つていった。

俺はぼろ雑巾のようになり果てた哀れな男子生徒に目を留めた。虚弱を絵に描いたような、鉛筆を連想させる細い体。中途半端に伸びされた出来損ないのロングヘア。田元まで伸びた前髪が、大きな黒縁の眼鏡にかかり、その合間から時々のぞく弱々しい瞳が、暗いイメージにアクセントを加えている。まさに、不良に絡まるる為に存在する人間が、たつた今不良に絡まれて地面にうずくまつっていた。

気のせいか、俺はその男子生徒を知っているような気がした。しかし、いくら考えてみても名前は浮かんでこない。やはり、ただの思い過ごしだろうか。

考え込んでいるうちに、けたたましいチャイムの音が響いた。ぼろ雑巾のようになり果てた男子生徒は、ゆっくり起きあがると、その場から立ち去つていった。

## 第8話・初恋……！（その1）

結局、今日も一度として授業に出ることもなく俺は学校を後にした。あの悲劇の初登校から、早一月。

初めのうちは、もしかすると授業をサボって屋上で昼寝をする不良生徒と、先生の言いつけで不良生徒をたしなめにくる、学級委員の飛びきり美人の女の子との運命的な出会いがあるかも……！なんて、こりもせず淡い妄想を繰り広げてみはしたが、やはり、現実は真冬の季節に冷水を頭からかぶるがごとく冷たかった。学級委員の飛びきり美人の女の子どころか、人っ子一人俺を呼びに来る人間などいやしない。それだけならまだしも、屋上に来た人間は俺と目が合うと

「ひい」

と短い悲鳴をあげて、きびすを返して逃げていきやがる。

なにか？

俺は檻の中に閉じこめられた凶暴なライオンなのか？お前等は、檻の中に放り込まれたとしてもおいしそうなえさなのか？

どう見たって同じ人間だろうが！

そうして、屋上は悲しくも俺のプライベートルームと化してしまった……。誰かが呼びに来てくれるかも……！ などと、ドキドキしながら寝たふりして待っている俺のかわいいところなんて、この冷たすぎる現実の中では救われようもなかつた。

大体、俺は根が真面目な人間だ。

そこら辺にいる自ら勉学を放棄している不良どもと違つて、できることなら高校生としてそれ相応の勉学に励むことを強く望んでいる。頭だつて、自分で言ひのもなんだが、いい。

中学時代も、まともに授業に出られなくても（出ないのでなく）テストでは平均80点以上を常にキープしていた。

分かりやすく解説されたノートもなく、どこが大事でどこがテスト

に出るというヒントも全くない状況で、だ。陰の努力を語り出すと思わず握り拳を作つて力説してしまうほど、俺はがんばり屋さんなのだ。しかし、それもありもしないカンニング疑惑や、答案用紙盜難疑惑が持ち上がり俺は勉強をしないでいることを余儀なくされた。それからは、成績ガタ落ちだ。親からもとうとう見放された。

「勉強だけがあんたの取り柄だったのに……」

絶望して泣き出す母親のその台詞は、今も俺のもろくてとつてもナイーブな心の真ん中に大きな風穴を開けている。あ、思い出すと今も涙がこみ上げてきた……。

世の中は真っ暗だ。俺の歩いている道に、光はもう差し込みはしないんだ。ちくしょう！　もうたくさんだ！　そんなに俺を悪い人間にしたいなら、お前等の望み通り傍若無人な極悪人になつてやろううじやねえか！　目が合つた人間片つ端から無差別に襲つてやる！　こうなつたのも、全部お前等のせいだからな！　俺はこの冷たすぎる社会の生んだ哀れなバーサーカーとして、人類全員に噛みついてやるんだ！

と、自暴自棄のどん底につき落ちていた俺が、なぜこの一月の間毎日刑務所のような（なんの楽しみもないという意味）学校に通い続け、猛り狂つた破壊衝動に身を委ねなかつたのかといつと……。俺は携帯電話で時間を確認しながら、人で賑わう商店街を早足で抜けた。商店街を抜けた少し先にある交差点に着くと、そこで足を止めてもう一度時間を確認する。

もう、そろそろだ。俺は携帯の待ち受け画面をのぞきながら、とりあえず道路の端っこに突つ立つても周りから変に見られない状況を作り上げた。もちろん、目だけは目と鼻の先にある交差点に集中している。

「……！」

来た！

目と鼻の先にある交差点を、いつものように急いだ様子で小走りに横切つていく、すばらしくきれいな美少女。充分に高鳴つていた俺

の胸が、さりにヒートアップして俺の目はその美少女に釘付けになる。

彼女が俺の視界に留まっているのは、ほんの2、3秒ほどの間だけだ。そして、その2、3秒のためだけに、俺は毎日なんの楽しみも待つていらない学校に通っているというわけだ。

これは、つまり……恋、というやつだ。俺は名前も歳も、一切素性の知れないその美少女に恋をしてしまっているのだ。

15年生きてきた中で、恋なんて一度もしたことがない（つていうか、俺に近づく女の子なんて全くといっていいほどいない）俺が、恋なんでもの話の中でしか知らないような俺が、恋をしている……。というか、多分これは恋というやつだ。恋というやつは、綿飴のようにふわふわして甘い、夢のよつな心地よさを感じさせてくれるものと、いつか春姉が言つてたからな。

あの時は、恋する乙女の演説に適当な生返事を返してひどい目にあつた。ちょうど春姉の性格が歪みだしたのも、その後、恋する乙女が「恋なんて2度とするもんか！」と猛然狂つたあたりからだ。

あの時は、春姉の部屋に監禁されて、失恋のやけ酒に無理矢理つき合わされた上に、怒り兼ハつ当たりの高速上段回し蹴りを側頭部に見事にきめられ、天国の階段を昇りかけた……。おまけに、目を覚ますと知らないうちに自分の部屋に戻されて、空の缶ビールが10本以上俺の部屋に放置されていて、一滴もアルコールを摂取していないにも関わらず、両親にものすごい説教を受ける羽目になつた。翌朝、春姉は体調不良で学校を休んだ。多分、つてか間違いなく一日酔いだ。とまあ、そんなこんなで俺は間違いなく恋をしている。それも、初恋だ。

よく初恋は実らない、などという台詞を聞いたりするが果たしてそれは本当なのだろうか。もしそれが本当なら、確實に俺の人生お先真つ暗だ。つてか、破壊衝動を抑えてくれたこの恋が果てた時、俺は一体どうなつちまうんだ？

あの、無茶苦茶な破壊衝動プラス、失恋で絶望のどん底に突き落とされた俺が、その時この冷たすぎる社会に下す決断は。

ダメだ  
。.

犯罪者になつた未来の自分がありありと浮かんでくる。今はこれ以上深く考えるのはやめておこう。

俺の歩む真っ暗な道に、一筋の光が差し込んだ。  
今は……うん。

- עיר אטלס כירטוגרפיה -



## 第9話・初恋……！（その2）

はつきり言つて、俺は女の前に美人とかかわいいとかいう単語がつく異性が苦手だ。もちろん、嫌いな訳じやない。でも、見近にいる女の前に美人とかかわいいとかいう単語がつく異性をずっと見てきているので、どうしても警戒してしまつのだ。

そんな可愛い顔して、実は金にがめついんじやないかとか。

そんな華奢な体して、実は素手でコンクリートブロックを軽々と打ち碎いてしまうんじやないかとか。そんな愛くるしい笑顔して、実は兄弟だけにはその本性をあらわにし、自分のストレス解消の道具に利用しているんじやないかとか。つい、そんな現実離れした疑い（そんな女が現実に存在しているが）をかけてしまうのだ。つまり、俺は外見だけで人を判断するような人間では決してない。自分がそれで苦労してきて、軽い人間不信に陥っているということもあるが、外見だけで俺が誰かに惹かれるなんてことはまずあり得ないのだ。そう……。つまり、こうなつたことにはそれなりの理由があるのだ。

それは悲劇の初登校から一週間。停学が解けた翌日のことだった。

「うわあ、金常時だ」

「停学解けたのかよ」

「ねえ、あの死神もしかして今日から毎日学校出てくる気かな」

「げえ……」

教室に入った瞬間注がれる、クラスメイトたちの冷たいまなざし。俺を遠巻きにして聞こえてくる、ひそひそ話。俺のいない間に、ど

うやら俺の愛称は

「死神」

に決まつたらしい。その意味は知らないが、どんな意味を込めてのものなのかは大方想像はつく。

つていうか

「げえ…………」

つて……。そんな人の顔見てあからさまに嫌そうな顔して、嫌そうな声だすなよ。どんな言葉より、なにげにそういうのが一番傷つくし……。

登校初日、いきなり暴力沙汰を引き起こしてしまった以上、ある程度の覚悟はしていた。でも、現実にもう夢に描いた学生ライフが2度と夢の世界から舞い降りはしないことを痛感すると、俺の目から自然と涙がこみ上げてきた。俯いて、肩を震わせながら涙を堪える。そんな俺を見て、クラスメイト達がまた怯え出す。

ちくしょう！

俺はいたたまれなくなつて、悠然と教室から出ていった。例え、忌み嫌われている状況でも、30人以上の人間に注目されても緊張してまともな弁解などできるはずもない。つてか、あの時助けた女子生徒が

「金常時君！　あの時はどうもありがとうございました！　金常時君って、見た目はちょっと怖いけどとても優しい人なのね！　お友達になりましたよー！」

なんて申し出してくれることを密かに期待していたのだが、俺と目が合つなりその女子生徒は俺からすかさず目をそらしてしまった……。

まあ

「暴力を振るう人間に優しいもくそもない」と言われればそれまでだが

それにしたつて……。

……駄目だ。もはや、文句の一つも浮かんでこない……。

行くあてをなくした俺は、一人寂しく屋上へ続く扉を押し開けた。

夢も希望もなく、時間だけが過ぎていく。屋上の片隅に寝転がりながら、俺は目を閉じてなにもかも忘れようとした。それから、いつの間にか眠りについていた俺が目を覚ましたのは、顔になにか冷たいものが当たつたからだった。なんだ？

まさか、クラスメイトの誰かが居眠りをしている俺にいたずらをして

「こんなところでサボつてんじゃねーよ、金常時。ほら、教室に戻ろうぜ」

なんて言つて俺を呼びにきてくれたのでは！　などと寝ぼけながら考えもしたが、すぐにその考えは俺の思考が目を覚ますとともに虚しく消え去つた。

周りには人つ子一人いやしない。俺の顔に当たつた冷たいものの正体はただの雨だった。

「なんだよ……」身を起こしてがっくりと肩を落としながら、次第に雨足が強くなつてきたので俺は枕代わりにしていた鞄をひつからんで、慌てて屋内に避難した。自分がどれだけ寝入つっていたのか確かめるために、ポケットから携帯を取り出す。

4時30分。

……もう授業終わつてんじやん。つてかほつたらかしかよ……。

俺はため息をついて、とりあえず教室へ足を運んだ。案の定、教室はすでに戸締まりがなされた後でクラスメイトもみんな出払つた後だつた。

仕方なく、家に帰るために下駄箱へ向かう。と、たどり着いたそこには、降りしきる雨を前にいかにも傘を忘れて困つていそうな女子生徒が、下駄箱の前で立ち往生しているではないか。今日の天気予報は晴れのち曇り。しかも、降水確率は20パーセントだったので相当神経質な人間が用心深い人間ではない限り、傘は用意していいだろう。俺は少し離れた廊下の先から、その女子生徒を観察した。さして特徴のない、真面目で純朴そうな女子生徒だった。派手に着飾ることもなく、化粧もしていない。この手の人間なら、もしかし

たら大丈夫かもしね。

俺はゆっくり下駄箱に近づいて、上履きから靴にはきかえた。鞄からもしもの時に備えての折りたたみ傘を取り出して、女子生徒の後ろに立つ。女子生徒はすぐに俺の気配に気づいたらしく、びくつと肩を震わせたかと思うと、ぱつと後ろを振り返った。

身長差の関係で、女子生徒の目は俺の胸元辺りに注がれていた。それから、女子生徒の目がいかにも恐る恐るといった感じで、ゆっくりと上へと這い上がつてくる。

「ヒツー！」

俺と目が合つと、女子生徒は短い悲鳴をあげて、大雨の中を一目散に走り去つていってしまった。

別にとつて食おうつてわけじゃないのに……。そりや、確かに無言で背後に立つてた俺も悪いけど ってか、俺はそんなに怖いのだろうか？

雨の中に身を投じることを迷つていた人間に、なりふり構わず大雨に自分の身をさらすことを選択させてしまうほど、俺は恐ろしく見えるのか？

いつものことながら、軽く傷つきながら折りたたみ傘を開いて学校を出る。いつのこと、この雨に身をさらしてしまいたい気分だったが、いちいち落ち込んだ気分につき合つていたらきりがないので、止めておいた。

学校を出て5分ほど歩くと商店街が見えてくる。そこを抜けて、そのまま通りをまっすぐ10分ほど歩いたところが俺の自宅だ。

こっちに越してきたときは、雨の中を一人寂しくとぼとぼ歩く自分なんて想像もしていなかつた。というより、考えようとしたくなつた。自分はきっかけさえあれば変わることができる。俺はそう信じていたんだ。だが、現実はそんなシュークリームのようにおいしくも甘くもなかつた。

「はあ……」

ため息を一つ吐き出したちょうどその時、不自然な光景が俺の目に映つた。

この大雨の中、しかも道路の真ん中に傘もささずに一人の少女が突つ立っていたのだ。こちらからは後ろ姿しか見えないが、その人物が女であることは間違いなかつた。背はあまり高くないが、身に着けている制服からは高校生か中学生らしさいことぐらにしか判断できない。俺は足を止めて、少し先にある少女の後ろ姿を見守つた。

この雨の中、傘もささずにやつてんだ？

しばらく様子をうかがつても、少女はびくとも動く素振りすら見せずにその場にたたずんでいた。少しうつむき加減にたたずむ少女の後ろ姿は、まるで大雨の線に紛れてそのまま消え入つてしまいそうなほど弱々しいものだつた。

「……くそ

やめておけばいいものを、俺はつかつかと少女のもとへ近づいていつた。それで、さつき痛い目をみたばかりなのにこつこつとくにどうしても無視を決め込むことができない自分の性格が恨めしい。

俺は手を伸ばせば届くぎり離れた距離まで少女に近づくと、背後から少女の頭上に傘を持つていつてやつた。ある程度距離を置いたのは俺の気遣いだ。もつとも、それも気休めにもなりはしないだろ。この少女もきっと、振り返つて俺と目が合つた瞬間悲鳴をあげるに決まつてんだ。ちくしょうめ。と心の中でヤケクソになつていると、少女がゆっくりと俺の方を振り返つた。

例のごとく、その視線は俺の胸元に注がれ、それから恐る恐るといった感じで上へと這いあがつてくる。ああ、やつぱり同じパターンだよ。くわ。次は悲鳴をあげて俺の元から逃げていくんだ。

パチチリと開かれたつぶらな少女の瞳が、俺の目を捉えた。だが、少女の瞳に恐怖の色は浮かばず、それどころかそこには感情そのものを感じることができなかつた。その少女のきれいに整つた顔立ちからのぞく不思議な印象の瞳は、確かに俺の心を惹きつけていた。

が、ちょっと待て。待つてくれ。

な……なんで、逃げないんすか？

予想外の事態に俺はうろたえるしかなかつた。

なんと、その少女は俺と目を合わせても、逃げ出すどころかじっと俺の目を見つめ返しているではないか。悲鳴の一つもあげもせずに。ありえない状況に、俺は金縛りにあつたがごとくペクリとも体を動かすことができなかつた。それでも、さすがにこの状況でいつまでも無言でいるわけにもいかず、俺は意を決してのどの奥から声を吐き出した。

「か、かかかかかかか

」

訳すと

「傘持つてないの？ 無理ないよね。今日天気予報じゃ雨降らな  
いって言つてたからも。でも、このままじゃ風邪ひいちやうよ？」

俺の家すぐそこだからさ、よかつたらこの傘使つてよ。ね？」「  
となる。

降り注ぐ雨の冷たさと極度の緊張のせいで、俺の口は畳頭の1文字をひたすら連呼することしかできなかつた。

うん。明らかに怪しい男だ。こんな男に意味もなく優しくされるのは、もはや嫌がらせ以外のなにものでもない。つてか、この手の俺の行動を優しさと受け取ってくれた人間など、今までいたためしがない。しかし、少女はまるで俺の言葉の意味を分かつてくれたみたいに、可愛らしい顔を柔らかく微笑ませて

「ありがとう」

と言葉を発したではないか。俺はあまりの出来事に、完全にフリーズ（行動不能）してしまつた。

差し出した傘は少女だけを守つて、大粒の雨は容赦なく俺の体を濡らしていた。少女はそんな俺をしばらく見つめてから、小さく会釈をすると傘から出でていつた。

「……！」

誰もいなくなつた空間に傘を差し出したまま、少女の後ろ姿が雨の線の中に消えていくのを俺はじつと見守つた。

「これは、夢か？ ……ああ。夢だな。夢に決まつてる。俺はほっぺたを思い切りつねつてみた。そんなベタな方法しか取れない

ほど、俺は動搖していたのだ。

道路の真ん中で、広げた傘を使いもせずにまっぺをつねつて  
「いて！」

と声をあげている。どこからどう見ても、おかしな人間だ。この瞬間をクラスメイトに田撃されたなら、おそらく明日から俺の愛称の前に

「変人」

という単語が加えられることだろう。と、まあそんなことは置いといて、確かに痛みとともに俺はこれが夢じやないことを痛感した。まさか、こんな冷たい世界の中に俺に微笑みかけてくれるような人間がいたなんて……。

俺を見ても、怯えずに

「ありがとう」

なんて言ってくれる女の子がいたなんて……！

俺は感動にうち震えた。あの娘は、この冷たすぎる社会に舞い降りた、たつた一人の天使だ。いや、人間であることに違いないが、とにかく天使だ。マイ、エンジェルだ！

幸福を感じることに慣れていないせいか、こんなときにいい例えも思い浮かばない。

と、とにかく……！

あ、あの娘とお近づきになりてえええ！

第9話・初恋……！（その2）（後書き）

## 第10話・初恋……！（その3）

俺を見ても怯えないということは、心が綺麗な証拠だ。俺の、この意味もなく相手を怯えさせてしまう特性も、こいつのことと計ることだけには役に立つのだ。もつとも、俺を見ても怯えない女の子が見近にいるが、その場合だけは例外だ。その女の子の場合はただ単純に俺よりも喧嘩が強いわけで、怯える必要などこれっぽっちもなく、その心は……。

とにかく、その翌日から俺は学校が終わると彼女と出会った周辺を中心には彼女の搜索を開始した。そして、苦労の末ついに彼女がいつも帰り道に通っている通りを発見し、毎日ひたすら2、3秒の間だけ彼女を見守っているというわけだ（決してストーカーではない！……つもり）。

あの雨の日に、彼女がなぜ傘もささずにあんなところに突っ立つていたのかということは心の端っこに引っかかってはいたけど、様子から察するにきっと何か悲しいことでもあったのだろう。

例えば、失恋……とか？

だとしたら、彼女は今フリーということになる。

そして、その時期に彼女と出会ったことは、まさに……運命だ！

そう！ 神様が俺にあの娘と付き合いたいこと言つて、優しく微笑んでいるのだ！ そうとしか思えない！ などと思ひ

つつ、出会いからこつち声すらかけられず末だに彼女の名前すら知ることができていない現状にはがみする日々が続いている今日この頃……。

なんとかして早く彼女とお近づきにならないと、いつ悪い虫が付くとも限らない。それに、あの天使のような綺麗な心と容姿を備えた女の子を、世の男ども（俺も含む）が放つておくわけがない！ 早く手を打たなければならないことぐらい分かつてはいるのだが、こと恋愛に対して俺の控えめで、人見知りする性格はその本領を発

撃してしまう。己のままでは、己の恋も夢に描いた学生ライフと同じ道を辿りてしまひのは目に見えてくる。

どうする？ どうすればいい？ とりあえず、俺の存在を相手に知つてもらわなければ駄目だ。とりあえずは、そこからだ。そう。問題はどうやって俺という人間をあの娘に気づかせるかなのだ。

散々悩んだ挙げ句、全くいい手段が思い浮かばなかつた俺は、ある恐ろしい結論にたどり着いてしまつた。どうやつてあの娘と知り合いになるかはともかく、女の子のことは女の子に聞くのが一番ではないか。こともあるうに、俺はそう思い当たつてしまつたのだ。念のため断つておくが、俺にそんなことを相談できる女の子の友達なんていやしない。身近にいる女の子といえば、そう……春姉だけだ。しかし、春姉に相談したとしても結果は見えている。つてか、それは自殺行為だ。あの自己中心的な人間が、俺の相談を真面目に聞いてくれるとは思えない。

「あんたが、恋？　マジで？」  
「ちょっと待って。超ウケるんだ  
けど」

まあ、要は俺が恋をしていることを知られずに、それとなく女の子の気持ちというものを聞き出せばいいだけのことだ。  
あくまで、さりげなく。あくまで、自然に。あくまで 絶対ばれないように！

ホームドラマなら、ここは少々くさい感は否めずも、思わずふつと微笑んでしまうような姉弟の微笑ましいシーンになるはずだ。高視聴率ゲットすること請け合いだ。が、現実はドラマのよじに微笑えましくも、優しくも、甘くもない。

ちくしょう！　傍若無人な姉を相手に、微笑ましいシーンなんて別の観点で高視聴率がゲットできても、その時にはできるか！

俺の恋ははかなく散つてんだよ！ シャレになんねえだろ？

「……くそ。なんで姉弟間で素直に恋の相談もできないんだよ……」

沈痛な思いを胸に宿したまま、その1時間後に

「ただいまー」

という春姉の声が玄関から響いてきた。俺は、ゴクリと睡を飲み込むと、深呼吸を数回繰り返してから覚悟を決めた。

## 第1-1話・初恋……（その4）

春姉が帰つて来て2時間後。ちょうど春姉が入浴を済まし、部屋に戻るのを見計らつてから、俺は姉の部屋のドアをノックした。それまでに充分モチベーションを高めていた俺だったが、ドアを開けると同時にそのモチベーションは、見事に打ち落とされることがなつた。開いたドアのわずかな隙間を縫つて、謎の高速飛行物体が俺の顔面を直撃したのだ。

「ちょっとあんた！ なに勝手に部屋に入ろうとしてんのよ！」頭の芯にまで届く衝撃にクラクラしている俺にお構いなく、春姉の怒鳴り声は俺の三半規管を激しく揺らした。俺は、床に落ちた謎の高速飛行物体に目を落としてから、ベッドにつづ伏せに転がつて、俺をにらんでいる春姉に目をやつた。

ああ……。つまり、一番手近にあつた枕を俺の顔面めがけて投げつけたというわけか。だが、ちゃんと俺は部屋に入る前にノックはしている。

「ちゃんと……ノックしただろ」

俺はまだクラクラする頭を抑えながら、できるだけ不満が相手に伝わるようにしきめつ面をしてみせた。すると、春姉は俺以上のしかめつ面で切り返してきた。

「あんたねえ、ノックの後に声ぐらいかけらんないの？ いくら、姉弟だからって私は年頃の女の子なのよ。そうでなくとも凶暴な弟をもつて気苦労が耐えないとてのに、こんなことでいちいち神経使わせられちゃたまんないわ。っていうか、あんたこうこうことに無頓着すぎんのよ。よく、女の子の気持ちぜんぜん考えよつとしない図々しいバカ男がいるけど、あんたはその典型ね。一回死んでみたら？」

「……」

またに、その女の子の気持ち、とこうやつを知るために元に立ち

ているのだが、やはり俺は大きな間違いを犯そうとしているのかかもしれない。少なくとも、俺が知りたい女の子の気持ちというものは、容赦なく弟の顔面に枕を投げつけたり、平気で死ぬことをお勧めしてくるような女の子のものとは、180度違うのだ。

「なに、その目。なんか言いたそうね」

無意識のうちに、俺は春姉をじつとにうんていたらしい。俺は慌てて「別に」

と言つて皿を逸らしてから、足下に転がつた枕を拾つて春姉に放つた。春姉は身を起こして枕を受け取ると

「で？」と面倒くさそうに声を出した。

「なんの用？　あんたが私の部屋に来るなんて珍しいわね」

「ああ。まだこっちに引っ越してくる前、あんたの失恋のヤケ酒に無理矢理付き合わされた挙げ句、高速上段回し蹴りを側頭部に見事にキメられて天国の階段を昇りかけた時以来だよ。もつとも、酔っぱらつてたあんたの記憶には、カケラもそのことは残つてないだろ？　から、よけい珍しく感じるだらうね。などと思いつつ、俺は早速話を切りだした。

「ちょっと、相談したいことがあるんだ」

「なによ。金だつたら貸さないわよ」

「この金の亡者め……」

「そんなんじやないよ」

「じゃあ、なんなのよ。どうでもいいけど手短にしてよね。私も暇じゃないんだから」

ベッドの上で開かれているファッショングッズ雑誌。その横に転がつてゐる食べかけのスナック菓子の袋。テレビから漏れてくるバラエティ一番組の派手な笑い声。

もし、お笑い芸人のツッコミ担当ならば

「アホ！　どうから見ても暇やろが！」

などと関西弁を用いて躊躇なく頭をひっぱたく場面だろうが、もちろん俺がそんな行為に及ぶことはない。受けを取るために命を取ら

れるなんて、真つ平ごめんだ。

とりあえず座りなさいよ、との春姉の言葉に促されて、俺は花柄のレースのテーブルクロスがかけられた背の小さな丸テーブルの前に腰を下ろした。その凶暴性はともかくとして、春姉も一応は女の子なのだ。部屋はある程度綺麗に掃除されているし、部屋の中に置かれているものの多くも

「かわいい女の子」

をイメージさせるものばかりだ。まあ、これで部屋の中まで男勝りなら、正真正銘、男の出来上がりだ。

「で？ 相談つて？」

そう言つて、春姉はベッドの上で胡座をかいた。

「ああ……」

「なによ。ずいぶん深刻そうじやないの」

そう思つうなら、うかれた顔するのはやめてくれ。つてか、その元凶は他ならぬあんただ。

「なに遠慮してんのよ、水くさい。一応姉弟なんだから、お金以外のことならなんでも相談に乗つてあげるわよ」

正直、その優しさは見当外れだが、ここまで来た以上もう引き返すこともできない。俺は決死の覚悟を決めて春姉に目を向けた。

「と、友達に相談されたことなんだけど、正直、俺にはよく分からぬことなんだ」

「へえ！ あんた友達できたの？」

「え？ あ、ああ……」

「ふうん。よかつたじやん。 にしても、世の中には物好きな人間もいるのねえ。今だから言つけど、実は私あんたには一生友達できな」と思つてたのよ

「……余計なお世話だ」

そういうことは思つても口に出すんじやねえ。

「で？ その友達になにを相談されたつて？」

「ああ……。実はそいつ好きな女の子がいてさ」

「へえ」

春姉の目に、好奇心といつたちの悪い光が宿り出す。俺は背筋に冷たい汗を滴らせながらも、それを気取られないよう努めて冷静に先を続けた。

「正確には、最近好きになつたつてことらしい。相手は他の学校の子（多分）で、そいつのことは知らないらしい。同じ学校じゃない以上接点もあまりないし、どうすればいいのかって。正直、そういう話、俺苦手だから」

「なるほど？　それで、そのあんたの友達はどうしたいつて言つてんの？」

「どうしたいつて　それは、まあ……とりあえず、相手に自分の存在を知つてもらつところから　」

「なに弱気な」と言つてんのよ。そんなんじゃ他の男にその娘取られちゃうわよ」

「……じゃ、じゃあ、どうしようってんだよ」

「そんなの決まつてんでしょ。告白よ。こ・く・は・く

「な！　なに、突拍子のないこと言つてんだ！　それじゃ、俺がここに来た意味ないだろが！」

「ばーか。なに本気にしてんのよ。知らない男にいきなり告白なんかされたつて気持ち悪いだけだつての。冗談よ。じょ・う・だ・んこ、こいつ……！」

「ほんつと、あんたつて分かりやすい性格してるわね」

「……」

「で？　あんたはどうしたいんだっけ？」

「だ、だから……！　とりあえず俺の存在をその娘に　」そこ

まで言つて、俺ははつとして言葉を止めた。  
ちょ、ちょつと待て……。

あんたは、どうしたい？　俺の……存在？

恐る恐る春姉の顔をのぞくと、春姉はその愛らしい顔に不気味な薄ら笑いを浮かべて、俺を見下ろしていた。そこから感じ取れるのは、

もはや悪意以外のなにものでもなく、間違いなくそれは俺の恋の方を暗示している。

かつてない恐怖と焦燥感に、俺の意識は一瞬どこか別の世界にジャンプした。

「とにかく……！」「まかすしかねえ！」

「あれー？ どうしたの、隼人君？ 俺の存在をその娘にどうしたいのかな？」

「な、なんのことだ？」

「なんのことって、あんたが恋しちゃってる女の子のことよ」

「ち、違う！ それは俺の友達だつってんだろ！」

「ばーか。自分から墓穴ほつといて、今更ごまかすんじゃないわよ。大体、あんたに友達なんてできるわけないでしょ。こいつちはハナからそんなホラ話信じちゃいないのよ。ってか、その手の嘘ついててて虚しくない？」

「ぐ……」

こっちだって、好きでこんな嘘ついてたわけじやねえ！ などと噛みつくこともできず、俺は弱々しく春姉からそっと目を逸らした。まさか、こつもあつさり嘘を見抜かれてしまうとは思つてもみなかつた。こうなつてしまつ事態も充分考えられたはずなのに……！ どうやら、俺の考えは相当に甘かつたらしい。あの何でもなさそうな冗談も、俺を興奮させて気を散らす為の伏線だったのか？ ちくしょうー！ なにが

「冗談よ。じょ・う・だ・ん」

だ！ 素知らぬ顔して、とんでもねえ罵しかけやがつて！ 春姉が俺の相談に素直に乗ってくれる、と申し出ている時点でおかしいと気づくべきだった。いや、この部屋を訪れること自体がそもそももの過ちだったのだ。 絶望感に打ちひしがれていると、やがて

「ちよっと」

と春姉の声が俺の耳に入り込んできた。俺は絶望感に苛まれながらも、なんとか、絶望のふちから顔を上げて春姉に目を向けた。

「あんた、なに勝手に一人で落ちこんでんのよ」

「……」

「なによ、その顔。言つとくけど、私はあんたが相談したいことが  
あるなんて言いながら、嘘ついてたのが気に入らなかつただけよ。  
別に、あんたの好きな娘見つけだそうとか、その後あんたの気持ち  
本人に暴露してやろうとか思つちゃいないわよ。まあ、あんたがボ  
ロ出さずに最後まで嘘通してたら、そうしてやるつもりだつたけど」

「ふ、ふざけんな！」

「あら、真剣よ私は。まあ、あんたが私に嘘つこうなんて100年  
早いことよ。つてかさ、いいじゃん別に。好きな娘の1人や2  
人知られたからつて、どつてことないでしょ？」

「それは、俺だからということか？ どうせ俺だからということわけか  
？ ふざけんじやねえ！ 俺にだつて、好きな娘がいて誰かに  
相談したいけど、恥ずかしいから

「実は友達に好きな娘がいてさ」

なんて、かわいい嘘をつく権利はあるんだよ！ つてか、それが  
嘘だと分かってても気づかない振りして弟の相談に乗つてやるのが  
姉としての務めだろうが！ などといふ俺の悲痛な心の叫びは、  
もちろんこの自己中心女に届くわけもなかつた。

「さて、隼人君。姉さん、恋する君にお願いがあるの。聞いてくれ  
る？」

にっこりと笑う春姉の笑顔を前に、俺は心の底から思つた。 や  
っぱ、来なけりやよかつた……。

## 第1-2話・特殊能力解禁！（その一）

結局、春姉は当初の俺の相談など無視して、自分の頼み」と（もとい命令）を済ますと、さつさと俺を部屋から締め出した。

「ち、ちよつと待てよ。まだ、話は終わってないだろ」

春姉の頼み」と（金儲け）を半ば強制的に引き受けさせられた後、「じゃあ、そういうことだから、分かつたらさつさと出でつてよ」と思いやりのカケラもない言葉を浴びせられながらも、俺はそう言つてできうる限りの抵抗を試みたのだ。だが、それも徒労に終わることとなつた。

「話つて？」

「いや、だから、今相談したことだよ」

「ああ。じゃあ……告白でもすれば？」

「……」

お前、さつき知らない男にいきなり告白なんかされたつて気持ち悪いだけ、つて言つたよな。とは思いながらも、すでにベッドに寝転んでファッション雑誌の続きを読みだした春姉を見ると、文句を言う気にもなれず、俺は無言で春姉の部屋を後にした。そして、俺は知られたくないことは知られ、しりたいことは知れず、挙げ句の果てには理不尽な頼み」と（もとい命令）を押しつけられるというおまけ付きで、無事（変に興味を持たれるよりはマシという意味）自分の部屋にたどり着いたのだった。

こんな扱いを受ければ、血氣盛んな世の15歳男子はみんな

「ふざけんじやねえ！ こらあ！」

とぶちキレることだらけ。姉弟の切実な恋の相談に

「じゃあ すれば？」

といついい加減なつなぎを用い、挙げ句の果てには「お詫び」とい放つたことをそのまま答えに引用していくような相手だ。

誰だつて、怒る。

怒るに決まっている。

だが、散々理不尽な扱いを受け、その度にぶちキレるほどどの破壊衝動を抑え続けてきた俺の理性は、打たれ続けるうちに知らず知らずじょじょに耐久力をつけ続けていたのだ。数年も休まるとともに与えてもらえず、強制的に鍛え続けられたそれは、今や向かうところ敵なしのキャパシティを誇るまでに成長を遂げており、もはや今の俺が姉の理不尽な扱いに

「ふざけんな！ こらあ！」

とぶちキレるようなことはまずありえない。

ぶちキレて返り討ちにあうか。理不尽な扱いに順応するか。悲しいかな。俺の中の防衛本能は、前者を選ぶことを許してはくれなかつた。

「はあ……」

この先、当分はこのネタで身勝手な頼みごとを押しつけられるだろうことを思つと、暗闇のどん底につき落とされたような気分になつてしまつ。まあ、部屋の明かりを消しているので、今は本当に暗闇の中にいるには違ひないのだが。

ドアを閉めて完全に暗闇に包まれた中で、俺はパイプベッドの上に身を投げた。春姉の頼みごととは、俺のある特殊能力をえさにして金儲けに利用することだ。それは、言い換えれば、えさにすれば金儲けに利用できるということで、春姉にとつて大事なのはそこだけなのだろう。現に、あの女俺の特殊能力を少しも信じぢやいないのだ（その時点でもう詐欺だ）。

俺は小さなため息をついて、せめてこのときだけでも全てを忘れ去つてしまおうと、そつと目を閉じた。視界が完全に閉ざされ、意識が暗闇の中にとけ込んでいくと、すぐに俺はその気配を感じ取つて、反射的に身を起こした。

皮膚の表面から、じわじわと染み込んでくるような異様な寒気。空気がよどんでもいるような、不自然な息苦しさ。そして、この気配。

俺は慌ててベッドから離れて部屋の明かりをつけた。瞬間的に感じた嫌な予感と直感は、やはり間違いではなかつたらしい。

「どうやら、せめてこの時だけでも、なんてつましい望みさえ俺には許されないようだ。」

俺は視界の中心に

「それ」

を捉えつつ、またため息をついた。

## 第13話・特殊能力解禁！（その2）

靈を感じじるにじができるようになったのは、いつからだつたのう。見えるようになったのは、しゃべれるようになつたのは、触れられるようになつたのは、いつからだつたのう。

正確な覚えがないということは、多分、物心がつく前からそうだつたのだろう。もっとも、幼かつた俺の不可解な言動を両親や春姉は、ただかまつてほしいだけの言動に過ぎない程度にしかとらえなかつた。俺自身、それが特別なことだとは理解していなかつたし、おかしいと自覚した頃には、もうそれなりの分別をわきまえるぐらいには成長を遂げていた。

「おい、聞いてくれよ。俺つて幽靈と話できんだぜ。すっげーだろ！」

なんて浮かれるほど脳天氣でもなかつたし、ましてや、この特殊能力をまともに他人が信じてくれると思えるほど、俺は馬鹿じやなかつた。つまるところ、俺に残された道は人知れず靈の存在に苦労する、といつことだけだつた。

パイプベッドの脇に立つてゐる少女に、俺は目を留めた。

見たところ、まだ7、8歳ぐらいだらうか。肩まで伸ばして整えられた髪。眉の少し上で切りそろえられた前髪のすぐ下には、子供らしい、丸くて大きな瞳がパツチリと開かれている。そして、無表情ながらも、どことなく愛嬌を感じさせるふっくりと膨れた鼻。どこにでもいそうな、何の変哲もない少女だ。そう……両足がない

こと以外は。少女は一向にしゃべるのをやめる気配を見せず、俺をただじっと見上げていた。このままずっと見合っているわけにもいかず、俺は仕方なく先に声をかけてやった。

「俺になんか用か?」

「やつぱり……お兄ちゃん……あたしが見えるんだ……」

「ああ。でも、俺に憑いてもなんもしてやれねーぞ」

「お花……」

「……」

「お花……ママが……くれた……」

「みせ。そんな哀願するような目で俺を見るんじゃねえ……。」

「お兄ちゃん……」

「俺は今、それどひんじやねえんだよー。」

「お花……」

「……」

「お兄ちゃん」

「だああー……分かつた!……分かつたよー!……分かつたからそんな目で俺を見るんじゃねえよー!」

「要するに、その不良たちを追い払えばいいんだな」

少女から大方の事情を聞き終えた俺は、そう言つて少女に確認をとつた。少女は、大きな目を数度しばたかせてから、安心したようにこつこつ笑うと

「うん……」

と肯いた。

「………… お前、いつ俺に憑いた?」

「今日……。学校から帰るお兄ちゃん、見かけた時……」

「…………おかしいな。今の今までそんな気配はなかつたけどな」

「それは、あたしがばれないようにしてたから……」

「ばれないようにしてた? なんでだよ」

「だつて、お願ひ聞いてくれるかどうか不安だつたから……」

「…………」

「でも、さつきお姉ちゃんにひどいこと言われてゐるのに、文句一つ言わないお兄ちゃん見てたら、大丈夫かなって……」

「…………言わないんじゃねえ。言えないんだよ……。」

俺はパイプベッドの上に寝転んで大仰にため息をついた。

この少女は、この近所で交通事故に遭い亡くなつた靈らしい。俺がこの町に引っ越してきたばかりの頃、散歩の途中で珍獸スキンヘッドたちに訳の分からぬ因縁をふつかけられた、二度と思い出したことのない場所。その少し先の交差点で事故に遭い亡くなつた子供というのが、どうやらこの少女らしいのだ。

一度、珍獸スキンヘッドたちを追い払いはしたのだが（ただの成り行きだが）、どうやら、この町には死者への供え物でサッカーをする単細胞がまだ他にもいるらしい。そこで……。

「お兄ちゃん……一度頭ツルツルのお兄ちゃん、やつつけてくれたでしょ……? だから、お兄ちゃんなら力になつてくれるかなつて思つたの……」

「………… というわけだ。」

「…………幽靈からの頼み」とは、これで何度目だろうか。生きた人間よりも死んだ人間との会話の総数が圧倒的に勝つてゐる俺つて……。とにかく、断りたいのはやまやまだが、一度憑かれるとこいつらは自分の頼みごとを聞いてくれるまで、しつこくまとわりついてくるのだ。よつて、俺に許された選択肢は、こいつらに目を付けられた瞬間から一つしかない。

「追い払つのはいいけどよ」「

俺はそう言つて、横田で少女を見た。

「お前にも、ちょっと働いてもらつだ

「え……」「

「ま、心配すんな。殴るよりよっぽど効く方法があんだよ」「

「なに……それ……？」

「それよつ、不良たちの出没時間とか分かるか？」「

「うん……夕方の5時から6時の間ぐらい……」

「そうか。じゃあ、明日それぐらこの時間に行つてやる。だから、今日はもう帰れよ」

「…………うん

少女は小さく肯くと、俺の部屋を出てこいつとした。俺は、少女の姿が完全に部屋をすり抜ける前に

「ちよつと、待て！」

と声をかけた。

「…………？」

不思議そうな顔をして、少女が俺の前に立つ。俺は言おうか躊躇つか迷いながらも、結局はそれを口にした。

「その……早く成仏しろよな。今度の奴ら追い払つても、ちよくちよく見に行つてやるからよ」

「…………ありがとう。お兄ちゃん…………」

もう死んでしまつたとは思えない、気持ちのいい笑顔を残して、少女は俺の前から姿を消した。

俺はその笑顔がもうこの世にはないものだといつてが信じられないで、少しの間、少女のいた虚空に目を留めた。

いくり田を凝らしても、やはりそこに少女の笑顔が浮かぶことはない。

俺はやりきれない思いを持て余しながら、そこから田を逸らした。

## 第14話・特殊能力解禁！（その3）

翌日、俺は少女との約束を果たすため、学校が終わってから（といつても、屋上で寝ているだけだが）すぐに例の場所に向かうはずだつた。だが、グラウンドから響いてくる運動部員たちの濁り一つないかけ声や声援の端っこに、濁りきつた怒声が含まれていること感じ取つた俺は、校門をぐるりとしていた歩を止めて、その怒声のした場所へ足を向けた。

「『るあ！』

その濁りきつた怒声、もとい、新種の珍獣のような鳴き声と人気のない校舎裏を結びつければ、そこでなにが行われているのかは見るまでもないだろう。

俺は複数の怒鳴り声がする校舎裏にたどり着くと、校舎の陰に身を隠して怒鳴り声の元を覗き見た。

「『るあ！』　てめえ、かかってこいよお！」

「だめだよ、ちー君。こいつにそんな根性ないつて

「はは。そうそう」

やはり、珍獣スキンヘッドとその連れ2人が、1人の男子生徒を囲んで楽しそうに暴行を加えていた。ちょうど、珍獣スキンヘッドたちの影になつて男子生徒の顔は見えなかつたが、おそらくその男子生徒は喧嘩などとは縁遠い、善良な生徒なのだろう。男子生徒はなす術もなく地面にうずくまって、体を丸めたまま不良3人に足蹴にされ続けていた。

「『るあ！』　てめえ、昨日言つといた金はもつてきてんだろくな！」

一通り男子生徒を痛めつけ終えると、珍獣スキンヘッドは男子生徒のズボンのポケットから財布をひつたくつて、中身を取り出した。

「うおお！　見ろよこれ！　マジで10万入つてやんのー！」

「うつそ！　マジでー！」

「一気に大金持ちですかー！」

……おいおい。10万はちょっとやりすぎだろ。どん方もどる方が、持つてくる方もどうかしている。と思つてると、馬鹿面をして浮かれた珍獣スキンヘッドは、その面に見合つた馬鹿な台詞を吐き出していた。

「おい、じるあ！　てめえ、次は100万持つてこいよー。」

「ちょっと、ちー君。そりゃいくらなんでも無理じゃない？」

「そうそう。99万にかけてやつたら？」

「じゃ、1万まけてやつか？　おい、よかつたなあ？　だはははは！」

珍獣スキンヘッドは、馬鹿笑いしながら男子生徒の頭を蹴ると

「おっしー　じゃあ、ゲーセンでも行こいぜえ！　ほんだけあ

りや一生遊べるぜえ！」

などと、アホなことを言いながら10万円の札束を自分のズボンのポケットに押し込んだ。男子生徒は四つん這いに身を起こすと、悔しそうに歯を食いしばって珍獣スキンヘッドたちの後ろ姿をにらんでいた。だが、珍獣スキンヘッドたちの姿が見えなくなると、男子生徒は力なく顔を伏せた。

「……」

珍獣スキンヘッドたちはしゃせ声が、だんだん遠ざかっていく。俺はその声が完全に途絶えてから、まだ四つん這いの格好のまま顔を伏せている男子生徒の前に立つた。

「あ……き、金常時……君……」

男子生徒は顔だけ上げて俺を見ると、弱々しく俺の名前を呴いた。

「……大丈夫か」

「う、うん……」

俺はまだ四つん這いになつたままでいる男子生徒に手を差し伸べてやつた。男子生徒はきょとんとした顔で、差し出された手と俺の顔を交互に見てから、おどおどと俺の手を握つた。

「あ、ありがと」

男子生徒が礼を言いきる前に、俺は握られた手を荒々しく振り落つた。男子生徒が、突然のことに大きくバランスを崩して、その場にしりもちをつく。

「 情けねえな、お前」

「え……」

「黙つて耐えてりや、そのうち誰かが助けてくれるとでも思つてんのか」

「……」

「少なくとも、俺はお前みてえな情けねえ奴は助けねえ  
き、金常時君には……分からな「よ……」

「あ？」

「君みたいな強い人間には分からないんだよお！　僕みたいな弱い奴は、一生誰かにいびられて……こづかれて……そうやって……  
そうやって生きていいくしかないんだよお！」

男子生徒の目からは、ポロポロと涙がこぼれ落ちていた。俺は、しばらく男子生徒を見下ろしてから、小さくため息をついた。

「……じゃあ、ついてこ「よ」

「え……」

「お前にいいもん見せてやるよ」

## 第15話・特殊能力解禁！（その4）

「ね、ねえ、金常時君……。ついてこいって、いつたいどこに行く気なの？」

「いいから、来いよ」

「で、でも……こつちは僕の家とは逆方向なんだ。困るよ、僕……。

今日、塾があるんだ」

「いいから、黙つてついてこい」

ひと睨みしてやると、男子生徒、もとい、坂本は

「ひ

と短い悲鳴をあげて、文句を言つのをぴたりとやめた。

坂本の怯えた表情は、どう見ても今にもとつて食われることを懸念しているようにしか見えない。

そして、もちろん坂本からすればその恐怖の対象は少し前を歩いている俺で、少しもそんな気のない俺が不機嫌になるのは仕方のないこと、不機嫌な顔をした俺を見て坂本がさらに怯えるのは仕方のないことで。

とまあ、そんな具合に俺と坂本はさつきから悪循環の無限ループにはまりこんでいた。そこから抜け出すには、坂本が、俺が決して傍若無人人間ではないことに気づくか、俺が坂本に微笑みかけてやるかのどちらかしか方法がないのだが、つい10分ほど前に初めて言葉を交わした他人同士の俺たちには、まあ、それは到底無理な話だった。

大体にして、坂本は俺のことを知っているようだったが、俺は坂本のことを不良に絡まるために存在している人間、としか認識していなかつたのだ。

その人間に坂本圭さかもとけいという名前が付いていて、おまけに俺のクラスメイトだったことも、ついさつき本人に聞くまでまるで知らなかつた。そんなわけで、とりあえず目的地に着くまでは俺も坂本も、この無

限ループの中をさまよい続ける他なかつた。目的の場所は、俺の家路の途中にある通りだつた。そこに着いた頃には、ちょうど日が暮れかかり、少女の言つていたとおり、通りの一角には柄の悪い見たところ高校生らしい集団が、すでにたむろしていた。

「あ、あき、あき、金常時君……？」

坂本は、理解しがたい奇抜なファッショնをした集団を見て、後ろから俺に恐る恐る声をかけてきた。

「も、もしかして、の人たち……あ、金常時君の……あ、お友達？」

「どういう意味だ、そりや。

無言で坂本に目をやると、坂本は

「ひい」

と短い悲鳴をあげて、俺から逃げよつとした。

「お、おい！」

慌てて坂本の襟首を背後からつかむ。坂本は、手足をじたばたさせながら見苦しい悲鳴をあげた。

「う、うわああー！　た、助けてよお！　あ、あんな大勢に

囮まれたら、ぼ、僕死んじゃうよお！」

「待てよ！　なに勘違いしてんだよ、お前！」

「うわあああー！　お願ひだよおー！　助けてよおー！」

「おい、坂本！」

「うわわああー！」

「おい！」

「あああああー！」

「だめだ、こりや……。

自分が集団リンチされると勘違いした坂本には、もはやなにを言つても無駄だつた。坂本はこの場から逃げようと、一心不乱に手足をばたつかせながら、間抜けなダンスを踊り続けた。

間抜けなダンスと悲鳴に興味を示した不良集団が、馬鹿笑いとともにこちらに近づいてくる。どうやら、本当にこいつは不良に絡まれにこひらに近づいてくる。

るために存在する人間らしい。俺は一心不乱に間抜けダンスを踊る坂本の背中に同情のまなざしを向けた。

「ねえねえ、なにしてんの？」

いやらしい薄ら笑いを浮かべて、リーダー格らしい男が先頭に立て俺に話しかけてきた。

これでもかというほどおつ立てられた金髪の髪。剃り込まれてなくなった眉毛に、鼻ピアス。なるほど。確かにこいつが一番頭悪そうだ。

「なになに、こいつら」

「あつ君の知り合い?」

リーダー格の鶏男（面倒くさいので）の後ろから、似たような人間が5人近づいてくる。坂本はまだ間抜けなダンスを踊っていた。

「おい。いい加減落ち着け」

いい加減、坂本のダンスを支えるのに疲れた俺は、坂本の襟首から手を離した。

「うわあ！」

バランスを崩した坂本が、派手に地面に転がった。それを見て、不良たちは一斉に笑い出す。

「き、ききき、金常時君……」

不良集団に囲まれている状況によつやく気づいた坂本は、地面にへたり込んだまま泣きそうな顔を俺に向けた。

「いいから、お前はそこで見てろよ」

「み、みみ、見てろつて……」「お取り込み中、申し訳ありません

ん

そう言って、鶏男は俺の肩に手を置いた。

「さしつかえなければ、君たちの財布の中身見せてもうえませんか？」

「つてか、さしつかえあっても見せてください」

耳障りな笑い声が重なつて響きあう。俺はため息をついて、不良集団と向き合つた。

質問 1

「あ？」

「そこの交差点で事故に遭つて亡くなつた女の件のこと、お前等知つてるか?」

一 はあ?  
なにそれ

「質問2 あつたばずのその女の子のための供え物の花瓶と花が、

めにほも見当たらないのはどこでだ?

「さあ？ 雖かが持つてつたとか？」 お前、知つてゐる？

「知らぬ。」あ、でも作工場ではうつむきがある。

よつね、しないよつね

實驗二(三)

卷之三

俺の言葉と同時に、冷たい風が辺りを吹き抜けた。それを合図にし

たよろに、空気が小刻みに振動してしわしわと肌にまとわり、不良たちは異変に気付いて、5人一斉に後ろを振り返った。

なにもない空間に、ゆっくりと少女の姿が浮かび上がる。不良たちの目が一様に少女の足元に注がれて、また少女の顔をなぞる。事故に遭った当時の姿を再現した少女の姿は、そこら辺のホラー映画に出てくる妖怪などよりよほど迫力があつた。

「かえして……」

「お花  
かえして

うつむいていた少女の顔が、ゆっくりと上がる。

たちまち、不良たちは恐怖に我を忘れ、我先にとの場から逃げ出していった。まあ、これでもう奴らがこの場所に近づくことは二度とないだろう。俺は遠くからまだ聞こえてくる不良たちの雄叫びに苦笑しながら、少女に目を向けた。

「 悪かったな。」 こんな使い方してよ

「 つづこ……」

「 あの花の代わつ……は、いらねえか」

「 お兄ちゃん……」

「 もう避けよ。今度は迷子になんじゃねーぞ」

「 うーん」

少女は小さく肯くと、静かに戸を開じた。

「 お兄ちゃん……」

「 ここよ。言わなくとも、靈（お前等）の氣持つは全部云つてく  
る。そういう体質してんだ」

「 じゃあ……きっと、だよ……」

「 ああ」 少女の笑顔がゆっくつと薄らいで、やがて、それはもうこの  
世界から完全に消えていった。

「 当たり前だろ。馬鹿……」

俺は少女のいなくなつた虚空に、そつと呟いた。

寂しさしか伝わつてこなかつた。ただ、それが少女のすべてだつた。  
だから、余計寂しかつた。

悲しみと寂しさの狭間にあるのが涙なら、涙に流せなかつた感情は  
どうに流せばいいのだろう。ただ、とめどなく溢れる寂しさは、ど  
こに流せばいいのだろう。

流れなかつた寂しさは、気付いてもらえなかつた寂しさは、いつか誰かが拾ってくれますか？　でも、もしそうだとしても、これだけは分かつてほしい。

私は、ただぎゅっと手を握つてほしかつただけだつてこと。私はただ、ぎゅっと抱きしめてほしかつただけだつてこと。私はただ、あなたを求めていただけだつてこと。

お母さん。この寂しさを拾つて欲しい人があなただけだつたつてこと。

ただ、それだけは分かつて欲しい。

冷たい風が流れた。ただ、冷たいと感じたのは、この風のせいじゃない。きっとそれは、少女の気持ちに触れたせいだ。

「さ、さき、金常時君……？　い、今のつて　？」

腰を抜かした坂本が、情けない声を出しながら俺を見上げた。

「昔から、俺は靈の存在を感じることができんだよ。見ることもできるし、話すことができる。その気になれば、さつきみたいに他人に見せることもな」

「へ、へ……？」

「今のガキは、交通事故に遭つて死んじまつた幽靈だ」

「き、金常時君？」

「いいから、黙つて聞いてみよ」

俺の言葉に、坂本は力なくうなだれた。

「初めからそうだったわけじゃない。多分、俺の成長と一緒に勝手に俺の特殊能力も成長しただけの話だ。ある日突然、相手が靈なら意思とは関係なくそいつ等の気持ちを感じることができるようになつた。そいつの思い出とか、記憶とか、考へてることとか、全部だ。迷惑な話だぜ」

「……」

「さつきのガキは、母親に虐待されてたつてよ

俺はそう言つて

「はは」

と笑つた。

「父親はいない。母親は酒乱。あいつの記憶の中には、痛いのと辛いのと寂しいのしかねえ。

あいつが母親のことママつて呼ぶと、母親は不機嫌になつてあいつをぶつた。

外に出るとき手をつなごうとしても、面倒くさそうに振り払われた。話しかけても、無視された。でも、ある日突然、母親が話しか

けてくれた。眠つてゐるところを叩き起こされたことも、部屋の中がまだ真つ暗で少し怖かつたことも、母親の息が酒臭かつたことも、そのときはどうでもよかつた。ただ、母親が自分に話しかけてくれたことが、なによりも嬉しかつたんだ。

あいつは母親の言いつけ通りに、500円玉一枚握りしめて酒を買ひに外に出た。外は真つ暗だ。いつも見てゐるはずの景色が全然違つて見えて、まるで別世界の中に放り出されたみたいだつた。怖くないくらい不安でよ、すぐ家に戻りたくなつた。けど、あいつはどうしても母親の役に立ちたかつた。だから、すぐむ足を無理矢理引きずつて、前に進んだ。

母親は近所のコンビニまでだからビリーハンティングしない程度に思つてたんだろ。

ただ、あいつはコンビニで酒が買えることなんて知らなかつた。自販機で済ませられるなんてことも知らなかつた。どうすればいいのか分からない。でも、どうしても母親の役に立ちたかつた。散々、暗闇の中を歩き回つた。気がついたら、自分がどこをどう歩いているのかも分からない。その時、道路を挟んだ向こう側に母親がいるのを見つけた。

道路を挟んだ向こう側にはちっぽけなスーパーがあつた。もう閉まつて明かりなんてついてなかつたけど、その店の前に置かれた自販機の明かりの中に見つけた人間が、あいつには母親に見えたんだ。その時、今までずっと我慢してた感情が溢れだした。どうしようもなく不安で、どうしようもなく寂しかつた。

気が付いたら、泣きながら、ママつて叫んでた。あいつは何度もママつて叫びながら、道路の向こう側にいる母親の元へ駆けだした。けど、あいつは母親には触れられなかつた

「き、金常時君……」

「あいつが死ぬ前に泣きながら叫んだ言葉は、多分、そこにいた人間から母親に伝えられたんだろ。事故後に供えられた花は、あいつの母親からのものだ。だから、俺に代わりの花なんて用意できねえ

んだ

「……」

「花を供えにきた母親がなにを思つてたのかは分からねえ。あれから、もう一度もここに来ないのは、あいつに愛情をかけてやれなかつた後悔からか？ それとも、自分の娘を死なせちまつた罪悪感からか？ あいつにも、俺にも、本当のところがどうなのかなんて分かんねえんだ。ただ、分かつてるのはあいつの母親がその時、泣いてたつてことだけだ」

俺は少女が最後に残した思いを手繕り寄せた。  
あのね、お兄ちゃん……。

（私の代わりに、ママがめんないつて……伝えてくれる……？）

「それが、あいつが最後に望んだことだ。 馬鹿なガキだろ？ 最後なんだ。最後ぐらい、文句の一つでも吐いてりや俺がちゃんと言えてやつたのに」

俺は最後に見た少女の笑顔を思つた。  
ゆつくりと薄らいでいくその笑顔が、やがて消えてしまつその刹那に見た少女の夢は、母親が花を供えながら泣いてくれている姿だつた。

ねえ、お兄ちゃん……。ママ、私のために泣いてくれたのかな……。  
今度は私のこと……抱きしめて……くれる……かな……。

なにをされても泣かないガキだった。虐待されても、つなごうとした手を振り払われても、無視されても　寂しさがどんなに溢れてきても、あいつは泣かなかつた。

そんなあいつが最後に見せた涙は、ちゃんと母親の元に届いたどうか。

あいつが流せなかつた寂しさを、母親は拾つてやつたのだろうか。逝くその瞬間にあいつが見た夢が紛れもない真実なのなら、その真実の中であいつが最後に望んだことも真実だつたと信じたい。それが刹那に過ぎなかつたとしても、それはあいつのすべてだつたから。あいつの想いは、確かにここにあつたから　。

## 第16話・弟子入り志願！（その一）

沈みかけた夕日の名残がアスファルトを照らして、そこに立つ俺としゃがみ込んだ坂本の影を映しだしていた。

言葉もなく立ち尽くし、遠くを見つめる俺。その俺の足下にしゃがみこみ、うなだれる坂本。そして、夕日を背にしたこのシチュエーション。

まさに、青春の1ページといつた様相だ。ここで、俺が坂本の肩にそっと手を置いて

「泣くなよ、坂本（泣いてないが）」

なんて優しい言葉をかけてやれば、坂本は

「金常時君！」

なんて言つて、俺に泣きながら抱きついてきそうだ。

俺は、うなだれた坂本の肩に手を置くわけもなく、なにもせずに言葉だけを投げかけた。

「お前、言つてたよな。自分は誰かにいぢられて生きていくしかなつてよ」

坂本は、ゆつくりと顔を上げて俺を見上げた。

「あのガキは、もうどんなに望んでも、自分で母親に想いを伝えることはできねえ。でも、お前はそんなあいつとは違つだろ。お前も俺も、生きてんだからよ」

「き、金常時君……」

「お前だつて、ほんとは変わりたいたつて思つてんだろ。違つか？」

「……」

「だつたら、自分はいつだなんて決めつけんなよ。望むことができるだけ、俺たちは幸せ者なんだからよ」

なんて言いながらも、この冷たすぎる現実を嫌とこりせど味わい、変わることもできずにこる自分のことを思つと、なにもできない坂本の気持ちを手に取るように分かつてしまつ。

それがどんなに難しいことで、それがどんなに勇気がいることなのか。でも、だからこそ、俺は坂本を放つておけなかつたのだ。俺は、初めから坂本にじやなく、自分自身にこの台詞を伝えたかつたかもしれない。

そんなことをぼんやりと考えていると、いつの間にか、田にウルウルと涙をためた坂本が俺のことを見つめていた。一方、ぼんやりとしているうちに、俺も坂本のことを見つめていたようだ。

見つめ合う俺と坂本。なんだ、この状況……。

俺は今にも抱きついてきそうな坂本に抱きつかれてしまつた前に、そそくせと坂本に背を向けた。

「じ、じやあな……」

「あ！　ま、待つてよ、金常時君！」

そう叫ぶと、坂本は後ろからいきなり俺の足にしがみついてきた。

「な！　なにやつてんだよ、お前！　放せ！」

無理やり引き離そうとしても、全体重をかけてしがみつかれた俺の足は、坂本を振り払うことはできなかつた。

周りの通行人が、白い目を俺に向けて横を通り過ぎていいく。いくら

引きずつても、坂本は俺の足にしがみついて離れない。

「おい！　いい加減にしろ！　恥ずかしいだろが！」

「ぼ、僕……！　初めてなんだ！」

「はあ？」

「僕のことを見てくれる人……まして、なにかを言つてくれる人なんて……初めてなんだよお！」

坂本の目から涙がポロポロとこぼれ落ちる。が、この状況で優しく手を差し伸べてやるほど俺はできた人間ではない。いつの間にか、通行人はわざわざ足を止めて俺たちを傍観し始めているのだ。

「いいから放せ、馬鹿！」

「待つてよお！　行かないでよお！」

じょじょに俺たちの周りに人だかりができてくる。俺はその気配に冷や汗を流しながら、なおも坂本を引きずり、坂本は坂本でなおも

俺の足に強くしがみついてくる。

ちくしょつ。このままじゃ、また変な噂がたつまつじやねえか！  
「おい！ いい加減にしろ！ 僕にどうじろつてんだよー！」

「ほ、僕！ 初めてだつたからー！」

「だから、なんだよー！」

「だからー。だから、僕を弟子にしてよー。」

「はあ？ 弟子ー！」

「お願ひだよー！」

弟子つて……なに時代の人間だよ。ってか、だから、ってなんだよ。だから弟子にしてくれって。

その気にさせた責任取れとか、そういうことか？

「ふざけんじやねえ！」

「真剣だよー！ 僕も金常時君みたいに強くなりたいんだよー！ 強くなつて、クラスの人気者になりたいんだよー！ お前、そこまで変わりたか？」

この際、それは無理だとはつきり言つてやつた方がこいつの為なのだろうが、今の俺にツツコミを入れる余裕などありはしなかつた。とにかく、俺と坂本を取り囮んだ壁から放たれる冷たい視線とひそひそ話の中から、一刻も早く抜け出してしまいたい。

俺は、涙ながらに訴えてくる坂本に、しょうがなく言つてやつた。

「分かつたよ！ 分かつたから、さつさとその手を放せー！」

「じ、じゃあ、僕を弟子にしてくれる？」

「あ？ あ……ああ」

と答えなければ、こいつは一生この手を放さないだろう。

俺の返事を聞くと、坂本はようやく俺の足から手を放した。こいつの貧弱な体のどこにこんな力が宿っているのだろうか……。

俺は満足そうな笑顔をして立ち上がる坂本を見つめ、ため息をついた。

## 第17話・弟子入り志願！（その2）

とりあえず、今日は塾があるからと言って、一方的に弟子入りを済ませた坂本は、満足そうに来た道を引き返していった。その後ろ姿は、未来の自分を想像してか、ルンルンと鼻歌が聞こえてきそうなほど弾んでいた。

おそらく、坂本は喧嘩に強くなりさえすれば、人気者になれると思っているのだろう。だが、それは大きな間違いだ。喧嘩が強い＝人気者、なんて図式が成り立つのなら、今頃俺は楽しい学生ライフを満喫しているはずなのだ。

つてか、気付よ坂本。俺に弟子入りして喧嘩強くなつたつて（喧嘩の強い坂本など想像できないが）、意味もなく他人に恐れられる不幸な人間が生まれるだけだぞ。　なんてことを心の中で呟きつつ、俺はその場を後にした。

「……でも、あんまり悪い気はしないんだよな」

とりあえず、これは友達ができた、ということでいい……のか？

「……」

分かんねえ。分かんねえよ……。

翌日の昼休み、誰も寄りつかない屋上に入ってきた人間は、もつて生まれた天性の暗いオーラにはそぐわない笑顔を俺に向けていた。

「あ、ありがとう！　ありがとう！　　金常時君…」

「……いや。いいよ、別に」

俺の言葉が耳に入つていないうらしく、坂本は何度もありがとう、ありがとうと連呼しながら、俺に感謝の気持ちをうさうたくなるまで表していた。

まあ、簡潔に説明すれば、昨日坂本が珍獣スキンヘッドたちに巻き上げられていた10万円を昨日のうちに取り返してやり、たつた今、それを坂本に返してやつたというわけだ。

もつとも、5千円はすでに使われてしまっていたので、戻ってきたのは9万5千円なのだが、坂本は全然そんなことは気にしていないようだつた。

とにかく、坂本にとつて大事なのは奪われた金ではなく、俺が奪われた金を取り返してくれたという事実なわけで、その既成事実が作りあげるものは俺と坂本の美しき師弟関係なわけで……。分かっていた。金を取り返してやれば、自ら墓穴を掘ることになることは……！でも、って、もう、説明するのもおづくうだ。ほつとけないもんはほつとけないんだから、しょうがないだろ……。

「ねえ、金常時君」

「あ？　な、なんだよ」

坂本は、満面の笑顔を俺に向けて声を出した。

「これから、金常時君のこと師匠つて呼んでいい？」

「いいわけあるか、この馬鹿」

即答する俺に、坂本は

「ええ？」

と間抜けな声を出した。まるで、どうして断られるのか分からぬみたいに。つてか、ほんとに分かつてないな、こいつ……。

「ど、どうして？」

「……どつしてもだよ」

ああ……。ここまでくると、いちいち理由を説明する事自体が、なんかもうウザイ。

「だつて、昨日僕を弟子にしてくるつて言つてくれたじゃないか」

「お前、あの状況で交わされた約束が本当に実行されると思うなよ」

そ、そんなあ！」

「……」

1

卷之三

「豈匠はよせ。」

シカトを決め込んでいたのに、あまりにもベタな坂本のボケ（本人はいたつて真剣だが）に思わずツッコミを入れてしまつ。坂本は俺の切れツッコミ

と感心して、しかもついだれでしめた。

- 1 -

- 1 -

。 だめだ。この、俺が一方的に悪いみたいな空気耐えられねえ

俺はうなだれた坂本に、仕方なく声をかけた。

なあ、坂本。お前……俺が怖くねえのか？」

六

坂本は短い声を出して顔を上げた。

「え、うん。」

「おまえの片手は、

確かに、いつやって金常時君と話す前までは、君のこと怖い

つて思つたナビ……。でも、今は車のひと

俺は眼鏡の奥で優しく光る坂本の目を、まっすぐ見つめた。

本。  
お前。  
…

「頼りになる師匠だと思つてゐるよ」

「だから、師匠はよせつつてんだろ」

坂

「そ、そんなん！　お願ひだよー！」

……結局、こんなオチかよ……。

俺は情けない声を出して哀願してくる坂本を見つづり、ため息をついた。

## 第18話・弟子入り志願！（その3）

「で、なんでお前は俺についてくんだよ」

俺はすぐ横をぴたりついて歩いてくる坂本に田を向けて、ため息まじりに呟いた。どうやら、終業のチャイムが鳴ると同時に坂本は俺より先回りして、校門の前で俺が来るのを待っていたらしい。下校する生徒が無数にひしめき合つ中、いきなり「師匠！」なんてこいつに親しげに、かつ大声で声をかけられれば、誰だつて気が滅入つてしまふだろう。

つてか、知り合いに声かけられて人に他人の振りして素通り、なんてベタなコントみたいな真似をまさか自分がやる羽田になるなんて思つてもみなかつた……。

実際やってみると、周りの田は無視された方じやなく無視した方に向けられるのだ。

え？ なに？ あいつあんな奴に親しげに声かけられてんぞ。つてか師匠！ 師匠つてなんだよ！ 的な目だ。そんな中で「待つてよ！ 師匠！」なんて無邪気な台詞とともに後をついてこられては、もはや俺の下手な演技程度では、どうしようもないことは言つまでもないだろう……。

というわけで、俺のテンションはこれでもかとこうひどい下がつていた。今坂本に投げかけた質問も遠回しの「ついてくんな」的なものだ。が、そこは下校者ひしめく校門の真ん中で「師匠…」なんてなんの恥ずかしげもなく叫ぶことができる坂本のこと。

「なんでつて、師匠のお供をするのは弟子として当然のことじやないか」

とまあ、そんなわけで、俺のテンションは更に下降線をたどることとなつた。

「お前、師匠はよせつて何度言つたら分かんだよ」

「そんなこと言つたつて、僕もう君に弟子入り済ませりやつたし

「

「いや、勝手に都合よく済ませんな。ってか、承諾されてもないのになんで、迷いもなく弟子になりきつてんだよ、お前は」

「そんな！ だつて、あれだけお願ひしたのに！」

「したのなんだ！ お願いに対する答えの決定権を持つてんのは、する側じゃなくてされる側だらが！ それ無視して勝手に決定権行使してんじゃねえ！」

「そ、そんなあ……」

坂本が、情けない声を出してがっくりと肩を落とす。その様子は確かに同情をせずにはいられなかつたが、その肩に手を置いて、同情するなら弟子にしてくれ、と言わても困るので、俺はただ、足を止めてその場に立つけくへす坂本を黙つて見守つた。

「あ、金常時君……」

やがて、坂本はぶるぶると肩を震わせながら、かすれるみつな声で俺の名前を呟いた。

「僕……僕……本気で変わりたって思つてゐる。変わらなきやつて思つてるんだ……。だから」

「だから、他人を頼るのか？ 他人をあてにして、そいつの弟子になれば本当にお前変われんのか」

「……」

「俺には、どうしてでもそんな風には思えねえ。少なくとも、誰かを師匠呼ばわりしてはしゃいでる奴が、なにかを成し遂げられるとは思えねえよ」

なにも言ひ返してこない、坂本。

「よし。これで、もつこつに師匠呼ばわりされないで済むだ

ろ。

俺は無言でその場に立つけくへす坂本に「じゃあな」とだけ言つてそこから離れた。

悪いな、坂本……。俺に弟子入りしたとしても、お前の望む未来は100%叶わないんだよ（まあ、誰に弟子入りしたとしても結果

は同じである「う」とはお「い」といて）。

坂本を置いて、俺は商店街を抜け、いつも交差点の前で足を止めた。ポケットから携帯を取り出し、時間を確認する。

なんだかんだで、結局昨日は彼女を見ることができなかつたのだ。今日こそはこの日にちゃんと彼女を焼き付けておかねば……といつわけで、坂本。お前につきまとわれちゃこっちも困るんだよ。

「金常時くーん！」

つて、思つてゐるやばから……。

俺は背後から迫つてくる坂本の叫び声を聞いて、がつくじと肩を落とした。が、事態は

俺の予想（坂本にすがりつかれ、涙ながらに師匠を連呼される）を遙かに通り越し、さらに悲惨な展開へと突き進んでいた。

坂本の大声が背後から響いてきた次の瞬間、なんとこれ以上ない絶妙のタイミングで、彼女が交差点を通りがかつってきたではないか！

「……！」

俺は声にならない声（「わおおおおーー！」）をあげつつ、完全にフリーズしてしまった。

「、こいつなつたらもう、彼女がこいつに興味を示すことなく無事通り過ぎてくれることを祈るしかない。俺は、瞬きすることも忘れて、彼女の姿を見守つた。

一秒でも長く視界の中に留まつていて欲しくもあり、一秒でも早くこの場を通り過ぎて欲しくもある。相反する思いに悶々と葛藤する俺に気付かずに、なんとか彼女は無事交差点を通り過ぎ。

「金常時くーん！」

ることはなかつた……。

彼女が順調に通りの真ん中までさしかかつたといひで、本日一番の坂本の大声が彼女の耳に届いてしまつたのだ。彼女は坂本の大声にビクつと肩を震わせて、少し当惑気味に強ばらせた顔を俺に向かた。坂本ではなく、あくまで俺に。

彼女が足を止めて俺を見ている。もちろん、俺も見つめ返す（彼

女を見つめたままフリーーズしているので)。

見つめ合つ俺と彼女。

「……この状況は……ちょっと、いいかも。

「金常時くーん！」

つて言つてゐる場合じやなかつた。

彼女の瞳に見とれる暇もなく、背後から坂本の声が迫つてくる。俺はヒートアップした危機感（つまり坂本と知り合いだとか思われたくない）に手を貸してもらい、なんとかフリーーズを自力で解いた。がまあ、緊張のあまり俺の取れた行動と言えば、彼女からそつと目を逸らして、うつむくというかわいいものだけであり、現状は何の変化も見せることはなかつた。

「き、金常時君……」

とかしてゐるうちに、追いつかれたし……。

ああ……。俺の人生今度こそ終わつたな……。つてか、なんだよこの間の悪さは。なんでいつも小走りですぐ通り過ぎちゃう彼女が、今日に限つてゆっくり歩いてんのだよ。あれか？　女の子一人のために必死にすがる友達（？）を切り捨てる薄情な輩へのこれは天罰かなにかか？　これは、神様の粋なはからいといつわけか？

「き、金常時君……」

「……」

俺に追いついた坂本が、膝に手をついてハアハアと肩で息をしながら苦しそうにあえぐ。その隙に恐る恐る彼女の様子をうかがうと。

「……！」

またもや俺は声にならない声（げええええええ！）をあげつづ、フリーズしてしまつた。

なぜかは知らないが、なんと彼女は本来進むべき道を歩まずに、あらうじことか俺と坂本へ続く道へと足を踏み出してきたではないか！

「……」

いや、大丈夫だ。落ち着け。きつとこれは幻覚か何かだ。そ

うでなければ、彼女が俺と坂本の元へ歩み寄つてくるわけがないではないか？ そう自分に言い聞かせていううちに、彼女はゆっくりと俺と坂本との距離を詰めてきていた。

俺と彼女との残り推定距離 5メートル。

俺の心臓が悲鳴をあげだす。

4メートル。

全身の筋肉が勝手にひきつりだした。

3メートル。

「、呼吸がうまくできな……。

2メートル。

ち、ちょっと、待……。

1メートル。

「

バシッ！

え？

「

「いい加減にしてください……！」

突然頬を走る衝撃。目に涙をためて俺をにらみつける彼女。俺はなにが起きたのか理解できず、ただ、目の前にいる彼女の敵意向きだしの視線を受け止めることしかできなかつた。

「あ……さ、さなちゃん？」

背後から当惑したような坂本の声が響く。が、彼女はその声に反応することなく、依然俺をにらんだままだつた。

「兄さんがなにをしたって言うんですか！ これ以上兄さんにひどいことするのはやめてください！」

「ち、ちょっと待つて……さなちゃん……」

まだ体力の回復しきつていない坂本が、それでも乱れた呼吸を整えながら、俺と彼女の間に割つて入る。彼女は怒りに強ばつた顔を俺から逸らすと、一転して心配そうな顔を坂本に向けた。

「兄さん。大丈夫？」

「う、うん。でも、違うんだよ」

「え……？」

「はは……。紹介するね。この人は金常時隼人君。僕の……友達だよ」

「え……。じゃあ

「うん。僕のことを心配してくれるのは嬉しいんだけど……この人はさなちゃんが思つてるような人じゃないよ」

坂本の言葉を聞くやいなや、彼女は顔を赤くして俺に向き直つた。  
「ご、ごめんなさい！ 私、勝手に勘違いしちゃつて。ほ、本当にごめんなさい！」

申し訳なさそうに何度も頭を下げる彼女。苦笑しながらも、どこか嬉しそうな坂本。

駄目だ。まったく状況が把握できねえ……。

いきなりビンタされたかと思つたら、今度は謝られてるし。いや、そんなことより、坂本と彼女の一連のやりとりから感じられるこのただならぬ親密さは一体なんだ。坂本の奴は、彼女のことをさなちゃん、なんてかわいい愛称で呼んでやがるし、彼女も坂本のことを兄さん、なんてかわいい愛称で……。

つて、兄さん！

「ごめんね、金常時君。この子は、坂本早苗ちゃんつていつて、僕の妹なんだ」

ま、まさか……こ、この2人が……。  
き、兄妹いいいいいい！

## 第19話・弟子入り志願！（その4）

「おい、坂本！　この子がお前の妹だと？」にしちゃお前らぜんつぜん似てねえじやねえか（人のことは言えないが、とりあえず）

！　つてかお前、妹にちやんづけつて明らかにおかしいだろ！

微妙に丁寧語なのもなんか変だぞ！　それに明らかにキャラかわつてんじやねーかお前！　さんざん師匠呼ばわりされてきた今までの俺の苦労はなんだつたんだ！　この人は金常時隼人君。僕の……友達だよ　つて、なにはにかんでんだよこの野郎！　それができんなら初めからやれつてんだ！

つてか、いきなりビンタかまされて、いきなり謝られたつてどうすりやいいんだよ！　こちとら、気にしてないよ、ははは…。なんて即座に対応できるほど器用にできちゃいねえんだよ…。無言で睨み返すことしかできねえじやねえか、こらあ！　つてああ……絶対、怖い人だつて印象与えちやつてるよ。どうしてくれんだよお（坂本のせいではないが）！」

と、その場でつっこみと文句を全力でぶつけてやりたいのはやまやまだつたが、好きな女の子が半径5メートル以内にいる状況で、俺にそんな真似ができるはずがなかつた。というわけで、これから家の仕事の手伝い（寒家が花屋らしい）をしなければならないという彼女とはその場で別れ、成り行き上、俺は自宅に坂本を招く羽目になつてしまつた。

というわけで坂本を部屋に招き入れ、俺は今リビングの冷蔵庫で見つけた缶コーラを2つ手に持つて、自分の部屋へ向かっていた。

部屋に入ると、坂本は物珍しそうに俺の部屋をきょろきょろと見回していた。別に見ても楽しいものなどなく、どちらかといえば気分を害する（とつちらかっているといつこと）風情なのだが、まあ、あえてそこはつっこまないでおいた（おそらく、こいつも友達1人もいらないな）。

「ほらよ

手に持っていた缶コーラを手渡してやると、坂本は「ありがとう」と言つて、口元に落ち着きのある薄い笑みを浮かべた。やはり、妹との接触後から坂本のキャラは180度変わったままだつた。もし、1時間前までの坂本なら「ありがとう、師匠！」なんて言つてすがりついて来るし。 絶対。

「どうかした？」

まじまじと坂本の顔を見ていると、俺の視線に気付いた坂本が、そう言つて俺に目を向けた。

「い、いや、別に……」

どうやら、本人にその自覚はないらしいな。

俺は、坂本から視線を逸らして、缶コーラのフタを空けた。

「ごめんね、金常時君」

「……別に、気にしてねえよ（つねだ。ってか、好きな娘にビンタされれば誰だつてへこむ）」

俺は心にもない台詞を吐きつつ、コーラをぐつと一口飲んだ。

「きつときなちゃん、君のこと僕をいじめる不良連中と勘違いしたんだ。余計な心配かけたくないから、きなちゃんには僕が不良連中にいびられてることは隠してるんだけど、そういうのって、どうしても隠し通せるものじゃないからね」

「なるほどな」

「え？」

「妹に余計な心配はかけたくない。それが、お前の変わりたい理由つてわけか」

つてか、クラスの人気者になりたいとか言つてたけど、今は人格変わつてるしな。

「さなちゃんは」

そう言つて、坂本は虚空中に手を留めた。

「僕の本当の妹じゃないんだ」

「つてことは、お前ら血はつながつてないのか」

「うん。まあ……ね」

なるほど。それで、さなちゃんか。

「でも、さなちゃんはこんな情けない僕にも、すゞしくよくしてくれる。僕のことを本当の兄みみたいに思つてくれてる。

だから、僕にとって、さなちゃんは本当の家族以上に大切な存在で。

だから、さなちゃんに心配をかけさせたくないからかつて言われば、もちろん、そうだつて僕は答える

「……」

「でも、それだけじゃないんだ。あの時、君が僕に投げかけてくれた言葉は、君が周りが噂するような人じやないつて教えてくれた。

僕は僕自身のために変わらなきやいけない。それを気付かせてくれた君と一緒になら、僕は本当の意味で変われるような気がするんだ」

「坂本……」

「お前……もはや完全に別の生き物と化してるな……。でも、今の

お前となら、俺。

「ただいまー」

心の中で感動に浸つていたまさにその時、階下から響いてきた姉の声により、俺の感動は強制的に醒まされることとなつた。

「家人、誰か帰ってきたみたいだね って、金常時君？」

「あ、あ……？ な、なんだ？」

「いや、どうかしたの？ なんだか、顔色が悪いけど」「い、いや……。なんでもねえよ」

「そう？」

「あ、ああ」

落ち着け。とりあえず、落ち着け。俺は自分にそう言い聞かせながら、一気に「コーラをあおった。

「あー！ 私が昨日買つといたコーラ！ なんでなくなつてんのよー！」

そして、一気に噴き出した。

「う、うわ！ き、金常時君？」

「ご、ごほ！ な、なんでもねえよ」

「そ……そつ？ でも、もしかして、このコーラって 」

「……」

「僕、まだ空けてないから返そつか？」

「……余計な氣使つなよ」

「でも

「いいつて

「ありがとう、坂本。でも、もはや手遅れなんだよ。

と、そうこうしてゐる間に、静かな足音は確実に俺の部屋へと近づいていた。この静けさ＝春姉の怒り。つまり……そういうことだ。

トン、トン、ト……。

やがて、死神の足音は俺の部屋の前まで來るとぴたりと止んだ。まつすぐ俺の部屋へ來たといつひとは、どうやら、死神は初めから俺を刈るつもりだつたらしこ。

「ンンンン。

あくまで、穏やかなノックの音色が、俺を優しく死の世界へ誘つていた。

「隼人？ ちょっと、いい？」

100%作りものの優しさを帶びた春姉の声。おやうく、玄関で坂本の靴を目にしているので 　というわけだらう。そうじやなきや、今頃ドアは蹴破られ、死神の鎌はとっくに俺の首を切り落としているはずだ。

俺は重い腰を上げて、部屋のドアを開けた。

優しく微笑んだ春姉が、部屋の外に立っていた。が、その目がまつさきに2つの缶コーラに向けられたことを俺は見逃さなかつた。

「あら。もしかして、隼人のお友達？」

そう言うと、春姉はニッコリ笑つて坂本に軽く頭を下げた。  
「初めまして。隼人の姉の金常時春香です。よろしくね」

…… そうか。坂本の前では、そのキャラでいくつもりか。まあ、初対面の人間の目の前でいきなり弟を半殺しにはできないわな……。  
しかし、本性を知られている人間の目の前で、こうも堂々と上品で優しい姉を演じるとは、さすがは二重人格女。悔しいが、どこからどう見ても、非の打ち所が見あたらねえよ。

坂本も、春姉の演技に見事騙され、あんぐりと口を開けて茫然自失としてるし つて、坂本。お前、それはちょっとオーバーだろ。

「おい。どうした、坂本」

「ま、まさか……き、金常時春香?……ほ、本物?」

「?　お前、春姉のこと知つてんのか?」

「知つてるもなにも!　ピーチ姫コンテスト!」

「は?」

ピーチ姫コンテスト?　なんだそりや。

「ええ?　金常時君、もしかして、知らないの!」

俺の反応を見て、坂本は信じられない、と言いたげに顔を歪めると、自分の鞄から、一冊の雑誌を取り出した。

「これだよ、ほら。月刊、キャピキャピ萌え萌え~娘!」

いや、自信満々に言われても知らないから。そんな雑誌知らないから。つてか、お前もしかして、それいつも鞄に入れて持ち歩いてんのか?

「それの30ページを開いてよ」

「あ？ ああ……」

俺は坂本に手渡された、メイド姿の女の子が表紙を飾る「月刊、キヤピキヤピ萌え萌え～娘」たるもののが30ページを言われるがまま開いた。

「第8回ピーチ姫コンテストグラんプリ発表！」

でかでかと載せられた活字が俺の目に飛び込んでくる。

これが……。

ぱりぱりと頭をかいて坂本にちらりと目を向ける。坂本は血走った目を俺に向けていた。無言のプレッシャーに、俺は続きを読むことを余儀なくされた。

「な、な、なあんとおおああ今回投票総数は過去最高の記録を3432票も上回る18643票だあああああブラボーエイフウフウォッケ～盛り上がりってきたところで早速うううああ順位の発表だぜえええいやつほづグラんプリの栄光は誰の手にいいいやちなみにはいい個人的には萌え萌えレベルメイドコスプレの左京ちゃんかああもしくはレベル猫耳ローブの春香ちゃんがあああもしくはレベルピンクレンジャーのエリちゃんがあああもしくはもういか坂本？」

いい加減、ハイテンションな台詞をローテンションで朗読する」とに疲れたし。つてか、読んで分かったのは数字だけだったな。

「じゃあ、最後のページを開いてよ」

「あ、ああ……」

少しいらつき気味の坂本に気を使いつつ、俺は急いで最後のページを開いた。そこに、衝撃的な事実が載つていてことを知りもせずに。

「第8回ピーチ姫コンテストグラんプリはああああ～！ ダントツの8295票獲得うううあああああ～！ ジヤカジヤカジヤカジヤカジヤカジヤカジヤカジヤカジヤ～！」

エントリーナンバー42番んんんんあ！ 金！ 常！

春香ちゃんどうわあああああはーー (ソプラノ)

「第八回 以下省略」 きん、じょう、じ、はるか?

きんじょうじはるか……つて、金常時春香……」

そして、ケトンアリ後遺の文字の下には、でかでかと春姉の写真

力擲轟されて いた

さすがに、この事態は想定外だったようだ。春姉はなんらかの説明を求める俺から、気まずそうに目を逸らした。

サ、サイン、まだナませんか!!

そして、状況が分かつていらない男が1人。  
…。

一 あけかと二 二わしわ

俺は2人のやりとりについていけず、ため息をついて雑誌に載つ  
ている実の姉の猫耳ローブ姿に目を落とした。

確かに、可愛い。文句なく可愛いが、8295票獲得ってことは、この写真に8295人の男がまんまと騙されたってことだよな。だって、プロフィールの特技の欄に「空手ハートマーク（記号）」とは書かれているが、補足（世界3位です。変な気起）したらぶつ殺すわよ。うふ。）はなされてないみたいだからな。

にしても、なんでも春姉は「んな雑誌に……。

「うなでておおきなまき（ウナデテオオキナマキ）」。

俺は雑誌から顔を上げて、しつこくねちねちと質問を繰り返す坂本と、そのあまりのしつこさに少し引き気味の春姉に目を戻した。

「ちょっと、あんた！　いい加減にいつ何とかしなさいよ！」的な

目を坂本の質問に苦笑いで答えながら向けてくる春姉。いい気味だぜ、とその視線に気づかない振りをしてやるのも一興だな、とは思いながらも後が怖いので俺は坂本を止めにかかった。

「へええ！ コスプレが趣味なんですか！ 実は僕も」

「おい、坂本。もういいだる」

春姉のいい加減な返答の結果、話はわけの分からぬ方向へ突き進み、最終的には坂本の隠された趣味をも暴こうとしていたので、俺は慌てて坂本の言葉をさえぎった。

まあ「実は僕も」の続きがどういう類のものであるかは大方想像がつくが、一応坂本の名誉のために伏せておこう。ってか、坂本。お前、春姉の登場からまたキヤラが変わったな……。

「ええ！ もう少しいいじゃない！」

坂本は情けない声を出して、俺に向き直った。

「いや……昨日から春姉少し風邪気味なんだよ。だから よ」

「そ、そつなの？ ジャア、仕方ないね。風邪引いてコスプレのりが鈍っちゃ大変だもんね……」

「……」

……春姉は、こいつが俺の友達だと認識してんだよな。

「……じゃ、じゃあ、私はこれで失礼するわね」

「あ、はい！ ジャア、また」

「え？ え、ええ……」

おそらく、二人が接触することはもう一度ないだろう。

坂本は、部屋を出て行く春姉の後姿を名残惜しそうに見つめていた。もはや、妹に心配をかけたくないだとか、俺と一緒になら本当の意味で変われるだとか言ってたこと完全に忘れてるな、お前……。

「いやあ、うらやましいなあ、金常時君……」

そう思つなら、変わつてやううか。とは思いつつも、こいつの夢を壊すのも氣の毒（もづ、一度と春姉には会えないんだよ、坂本）だったのでやめておいた。

結局、うちに来るまでの経緯を完全に忘れ去つた坂本は、その後、

ピーチ姫コンテスト応募者すべての写真の良し悪しを事細かに解説した後、満足そうに帰つていった。

その五分後、俺の部屋を訪れた春姉は沈痛な面持ちで俺に言った。

「あんた……気持ちは分かるけど……友達はもっと選んだほうがいいわよ……」

俺は何も言い返せず、半ばやけくそ氣味に呟いた。

「……ほつといてくれ」

## 第20話・ドキドキの放課後！（その1）

「はあ……」

小鳥がさえずり、気持ちのいい陽光が降り注ぐさわやかな朝。この文句のつけようのないさわやかな朝の只中、俺の気分は奈落の底に突き落とされたがごとく、果てしなくブルーだった。

「ちょっと、隼人。早く出ないと遅刻するわよ」

気がつけば、リビングのテーブルの前に腰掛けているのは俺だけだった。親父も春姉も、とっくに朝食を取り終え、すでに家を出て行っている。しかし、俺はと、いまだ朝食も摂らず、ひたすら一人で落ち込んでいた。その原因は、そう。昨日のあの出来事だ。坂本の妹（現在俺が片思い中のエンジエル）に、勘違いから突如としてビンタを食らわされたあの記憶が、俺の頭から離れないのだ。あえてスルーしていたが、その後、彼女はビンタされたこっちのほうが恐縮してしまったくらい何度も申し訳なさそうに俺に頭を下げてきたのだ。それなのに、俺ときたら緊張のあまりまともに彼女の目を見られもせずに、ぶつきあがりまつに「別に……」と返すことしかできない始末……。

ちくしょう！ そんなのぜんぜん気にしてないのに！ 「はは、この早とちりさんめー」とかなんとか言つて明るく場を和ませつつ、自然な感じで彼女とお近づきになりたかったのに！ あれじや「ウゼえんだよ、てめえ」って言つてるようなもんじえねえか！ そのせいで、彼女、気まずそうにさつさと帰つちまつたし！

ま、まあ、すぐに帰つたのは家が花屋でその手伝いをしなければならないかららしいが、絶対、彼女に与えた俺の印象は最悪だ……。ああ……。夢にまで見た最高の学生ライフだけでなく、初恋まで俺の手から遠のいていく……。もやは、生きてる意味さえ見失いそうだ……。

「……」

やと。隼人つてば！

「あ、あ……？ 何だよ、お袋

「何だよじやないでしょ、もう一 一体今何時だと思つてるのー。」

「何時つて……まだ……」

そう言いつつリビングの壁にかけられた鳩時計を目にする俺。

「8時15分……つて、ええ！ いつの間にー。」

「馬鹿言つてないでさつさと支度しなさい！ 遅刻しちゃうでしょ

！」

「あ、ああ……」

どうやら、考え方をしているうちに大幅に時間が経つていたらしい。もつとも、授業をサボりまくつていて（決して本意ではなくて）俺からすれば、遅刻ぐらいどうってことはないのだが、悲しいかな、俺が学校で「死神」に祭り上げられている事実を知らないお袋に真実を語るのは忍びなかつたので、とりあえず俺は急いで支度を済ませ、家を出た。

「はあ……こりや、完全に遅刻だな……」

この期に及んで、遅刻の一つや一つはどうってことないが、教室に俺がいないことで喜びやがるクラスメイトたちの姿がありありと浮かんできて、俺はため息をついた。そして、とぼとぼと一人さびしく、いつも通っている通学路を歩く。

商店街を通り抜け、いつも彼女が通っている交差点に差し掛かつたところで、俺はふと足を止めた。気のせいか、道路を挟んだ向こう側の歩道に見知った人間を見たような気がしたのだ。

遅刻ぎりぎりのこの時間に、なぜか手持ち無沙汰に歩道の真ん中に立っている制服姿の女の子。足早に道を行くさまざまな人々があわただしい朝に追われている中、一人だけ時間に取り残されてでもいるようなその光景は俺の目を引くには十分だつた。そして、目を凝らしてみてから、俺は呆気にとられ、文字通り言葉を失つた。

肩辺りより少し長めに伸びたしなやかな黒髪。小柄でありながら、均整の取れた四肢はガラス細工の工芸品のような美しくも儂い印象を受ける一方、その発展途上の体つきは、少女ではなく女性として

の魅力を控えめに主張している。制服を身にまとった、清純を絵に描いたようなその女の子は、間違なく、俺の心を射止めた坂本早苗その人に間違いなかつた。

「……！」

驚きを通り越した驚愕に、俺の意識は思わず意味もなく虚無の世界にヘッドスライディングをかました。危うくその世界の住人になりかけたところを、通りがかつた散歩中のおじいさんの連れの犬にワンワン吠え立てられ、何とか目を覚ます。人間だけでなく、動物にまでも毛嫌いされる悲しき習性に救われはしたもの、やはり、神様は俺を救おうという気はまったくないらしい。

意識を取り戻した俺は、反射的に彼女に気づかれる前にこの場から逃げ出そうとしたのだ。しかし、道路を挟んだ向こう側に立つていた彼女が、犬の吠え立てる声にこちらに気づき、あらうことか彼女と目が合つてしまつたではないか。そのまま、目を逸らして知らん振りをしてくれることを祈つたのだが（それもショックだが）、なんと、彼女は迷うことなく、横断歩道を渡り、こちらに向かって歩を進めてくるではないか！

「……！」

心臓が悲鳴を上げ、冷や汗が背中を伝う。なぜ、どうして彼女がこんな時間にここにいるのかも、俺の元へ歩み寄つてくるのかも分からぬ。今まで、朝、学校に向かう途中に彼女を見かけたことなんて一度もないだけに、この出会いが偶然であるとは考えにくい。もしかして、手持ち無沙汰に歩道の真ん中に立つていたのは、誰かを待つていて、その相手は他ならぬ……俺？

その考えに行き着いたとき、俺の心臓は歓喜のあまりひとりでに小躍りを始めた。おまけに、彼女が徐々に俺の元に近づいてくるプレッシャーもあいまつて、小躍りからブレイクダンスにまでヒートアップした鼓動のせいで、うまく呼吸ができやしない。そういうている間に、心の準備もままならず彼女が横断歩道を渡りきつてしまつたではないか！ 早く、彼女に声をかけるための絶好の朝の挨

拶を考えなければっ！

「あれ？ 君って確か坂本の妹の…… サナちゃんだけ？ あ、ごめん。本名は早苗ちゃんか。おはよっ。びうじたのこんな時間に？」

急がないと学校始まっちゃうよ？」「

よ、よし……！（脳内思考時間3秒）完璧だ。どさくさに紛れてちやつかり「サナちゃん」なんて親しげな愛称で呼んじまえば、俺たちの距離も一気にムフフ…… つてか！

そして、とうとう彼女が俺の前までやつてきて足を止めた。うつむき加減に俺の前に立った彼女が、おずおずといった感じで顔を上げる。よし！ このタイミングでぶちかましてやれ！ と彼女の目をにらみ返す俺。しかし、彼女のつぶらでまっすぐな瞳と対峙した瞬間、火のついた俺の闘争本能は、頭から水をぶっかけられたがごとく、あっけなく鎮火されてしまった。

「……」

彼女を前にしながら、口を開かず仏頂面のまま彼女から目をそらす俺。やつぱ、いつもなんのかよ……。

「あ、あの、おはよっ」やいいます

心なし、というか明らかに沈んだ声を発する彼女。そして「……

ああ」と彼女に見向きもせずに小声でそつけない言葉を返す俺。声が震えて、それ以上言葉を交わせる状態ではないことはもやは言つまでもないだろう。手が震えて仕方なかつたので、ポケットに両手を突っ込んで何とかそれをじまかす。しかし、そんな俺の態度に、明らかに彼女の声は曇つていった。

「あの、昨日のこと、どうしてもちやんと謝りたくて…… 兄さんに聞いたらい、金常時さんの家この辺だつて言つてたから…… 迷惑だとは思つたんですけど……」

「それで…… 待つてたのか……」

「はい……」

彼女の言葉に「うほほー、うほほーーー」とはしゃぐ心情とは裏腹に、緊張のあまり俺は口から息を吐き出した。そして、それを迷

惑に感じてのため息と受け取つたらし。彼女は「『めんなさい…』と消え入るような声を出して、そのまま黙り込んでしまつた。  
「かん……！」そのままでは、俺の初恋がまともに相手と口を聞く前に消滅してしまつ。今の俺の生きる希望は、もやは彼女しか残されていないのに！ と心では思ひながらも、体は俺の言つこととを聞いてはくれない。どうして、俺は肝心なときにはいつもこうなのだろうか。そうやつて、今まで大切なものを何度もなくしてきたのに、一步もそこからは動けない。変われない。そんな自分がどうしようもなく情けなくて、どうしようもなくやるせなかつた。  
やがて、気詰まりな沈黙を破つたのは彼女のほうだつた。

「あの……本当にすいませんでした。初対面の人になんなことして……私は、てつきりあなたが兄さんにひどいことしてるんだと勘違いして……兄さん、学校でいろいろひどいことされてるみたいだから……私には、そんなことないって言つんすけど……」

「……」

「兄さんのこと……どうかよろしくお願ひします……」  
そう言い残し、彼女は俺の元から去つていつた。

## 第21話・ドキドキの放課後！（その2）

その瞬間、明らかに場の空気が凍つた。クラスメイトは一様に俺に視線をくれた後、まるで「2秒以上目を合わすと速攻殺されます」とでも言いたげに俺から目をそらす。あまつさえ、授業の解説をしながら板書をしていた女性教師まで、俺と目が合うと、手にしていたチョークをポロリと落とし、文字通り固まってしまう始末。つて、ちょっと待て先生。私これから犯されますみたいなその涙目はなんだ！ ちくしょう！ 教師のあんたまで俺に怯えてたら、こいつら（クラスメイト）まで余計俺を怖がつちまうじやねえかよ！ などと思いながらも、もちろんクラスメイトの前で堂々と吠え立てる度胸のない俺は、無言で自分の席にかばんを置いて、悠然と教室を出て行くしかない。教室を出ると、クラスメイトたちの安堵のため息が聞こえ、俺は軽く傷つきながら屋上へ向かった。

ちくしょう……。ちょっと、遅刻してきただけなのに、何だよあのリアクションは。こっちは、気を使って後ろの入り口から、なるべく音を立てないようにそつとドアを開けたんだ。遅刻の言い訳どうしよう、なんてかわいいこと考えてた俺が馬鹿みてえじやねえか。無言でとぼとぼと階段を上り、屋上のドアを開ける。いつもどおり、備え付けのベンチに腰を下ろして、ため息をついてから俺はその異変に気づいた。

「うお……！」

いつからか、屋上が俺のプライベートルームと化していたのまつたく警戒をしていなかつた。少なくとも、今日の今日まで、俺以外の人間が屋上に足を踏み入れるなんてことはありはしなかつたのだ（坂本以外）。そう、今日の今日までは。

屋上に備え付けられたベンチは、ちょうど三人がけ程度のサイズのものだ。それが二つ横に並べられてフェンスに向かい合うようにして置かれている。そして、そのベンチの一つを、見慣れない男子

生徒が仰向けに寝転がって一人で占領しているではないか。

ちゅうどベンチの背に隠れて見えなかつたので、腰を下ろすまで気づかなかつた。いや、しかし……誰だろう、こいつ？ まさに猛獸の檻と化し、不良連中さえ近寄らなくなつたこの屋上で、こうも無防備に惰眠を貪つてゐるあたり、どうやら口者でないことだけは確からしいが（自分で言つて悲しくなるな）。

「ふんわあああー……ああ……あう？」

そんな間抜けな大欠伸といつしょに、伸びをしながらベンチから起き上がる男子生徒。俺と目が合つた男子生徒は、目を丸くした後、数度目をしばたかせて、今度はきょろきょろと落ち着きなく周りを見回しだした。やはり、その辺の連中とは明らかにリアクションの種類が違うな、と思いつつ、俺は無言で男子生徒の様子を伺つた。ずいぶん、長いこと落ち着きなく周りをキヨロキヨロしていた男子生徒は、ようやく俺に田を畠めると（その間約一分ぐらい）、第一声を発した。

「ねえ、俺なんでこんなとこにいるんだつけ？」

「……あ？」

「あ、そつか。ここで噂の転校生を待つてたんだつた」

そう言って、ポン、と手のひらにグーを当て、思いついたように声を出す男子生徒。何かよく分からぬが、とにかく、絡みづらそうな奴だな……。

「で？ あんた誰？」

「……金常時……隼人……1-Bだ」

「1-B？ あ、俺も1-Bだつた。でも、何で俺こんなとこにいたんだつけ？」

「転校生を待つてたんだろ……」

「あ、そつか。えーと、なんて名前だつけ。確か、金閣寺……なんとか」

「もしかして、金常時隼人……じゃねえか」

「ん？ あ、そうそう、金常時なんとか。もしかして君、知つてる

？」

もしかして、こいつは俺のことを馬鹿にしているのだろうか。しかし、細長の目の奥にのぞく、ぼへへーとした能天気丸出しの瞳からは、悪意はまったく感じ取れない。おまけに、無造作にぼさぼさに伸ばして、手入れのまったく行き届いていない髪型も、何かこの人の人間性を物語っているようだ。男子にしては華奢な体に身に着けたカツターシャツのすそも、だらしなくズボンから中途半端にはみ出しているし、まあ、分かりやすく表すと、能天氣と無頓着がいい感じにくつづいて肩を組んでる、というような人間だな。

ともかくにも、本人に悪気はないようだったので、俺は親切に教えてやることにした。

「金常時隼人ってのは、俺だ」

「え？ 君が金常時なんとか？」

「隼人だ」

「ふーん、君が噂の死神さん？ ずいぶん人間っぽいね」

「……」

ケンカ売つてんのか、こいつ。とは思いながらも、俺の素性を知つてもひるみもせず口を利いてくれることが密かにうれしかったので、スルーしておいてやることにした。なんか、因縁つけてきてるつて雰囲気でもなさそうだしな。

「……俺に何か用か」

話題を変えるため俺がそう言つと、男子生徒はまたもや思いついたように、ポン、と手のひらにグーを当てた。

「そうそう。実は、クラスのみんなに頼まれたんだつけ」

「頼まれた？」

「うん。えーと……なんだつけ？」

「……俺が知るか」

「あ、そうそう。3年の何とかって人がなんか君に用があるらしくて、同じクラスのクラスメイトに言伝を頼んで、その言伝を俺が頼まれたんだ」

「……」

なんか、話がよく見えねえな……。

「言伝……つて?」

「ん? えと……なんだつけ。忘れた」

「どこまで、なあなあなんだよ、お前……」

「うーん。なんか、女人がどうとか言つてたような……」

「お、女?」

「うん」

ま、まさか、あれか。この話の流れからすると……密かに俺に思いを寄せる3年の先輩。そして、恥ずかしくて、俺のクラスメイトに言伝を頼む彼女。しかし、クラスメイトはみんな俺を恐れ（ここだけ現実的）近づけないため、この男子生徒にその言伝を頼んだとか、そういうことか? い、いや、いや、しかし、そんな奇跡的な展開があるわけ。

「あ、そつそう。確かに放課後に体育館裏に一人で来てつて言つてた」

あつた――――――――――――――――――――――――――――

「ま、ま、ま、ま、マジか……?」

「え? うん。それ以上は思い出せないけど

「じ、じゅ、じゅ、十分……だ……」

「そり? ジヤ、せつかくだから俺もう少し寝るナビ?」

「お、おひ……」

「ま、まさか……ここに来て、こんな奇跡が起るうとは……。

俺は、予想外の事態に、感動に打ち震えながら握りこぶしを作った。

「どこのどなたかは存じないが、俺の内面をしつかりと見ていくれたエンジニアがこの学校にもちゃんといたってことじやないか。そんなことに気づきもせず、俺つて奴は心のどこかで、理想の学生ライフをすでにあきらめて……。

だが、しかし! こうなったからには、俺の理想の学生ライフ再

臨だ！ 体育館裏！ 呼び出しだけの恋の告白！ 漫画やトレーディングカードでしか見たことのない憧れの展開が、今までに俺の手の内に……ってかかる！

こよしああー やつてやるー いつなつたら、といふと、どうふりと青春の膝元で甘えまくつてやるぜえ！

待つてろよ、青春！ まだ見ぬ、彼女！ 俺の学生ライフ、ここからが本番だ！

## 第22話・ドキドキの放課後！（その3）

昼休み。屋上にやつてきた坂本と「せつかくだから、もう少し寝る」と言つて、結局午前の授業をすべてサボリ（人のことは言えな  
いが）惰眠を貪つた男子生徒とともに、俺はベンチに腰掛ながら昼  
食をとつていた。坂本からの情報で、この男子生徒の名前は渋味健  
一、俺たちのクラスメイト（まあ、本人も1-Bと言つてたが）と  
判明。そして、自己紹介ついでにそのまま、なあなあな感じで昼食  
を一緒にとることになったというわけだ。それにしても「死神」と  
恐れられている俺と、いじめられっ子の坂本という、関わり合いに  
なりたくない人間ランキングというものがあるなら確実にナンバー  
1・2コンビ（なくてよかつた）になるであろう面子を前にして、  
のほほーんと「あ、じゃあ、俺も一緒に弁当食べていー？」と言つ  
てくるとは、ある意味すごい奴だと思う。どうやら、本人はそういう  
う世俗的なことに無関心、無頓着なだけで、つまるところ「何も考  
えてない」というだけのことなのだが、そういう「良也」も世の中  
にはあると思う。俺や坂本のことを何も知りもしないで避けるよう  
な連中より、何も考えず俺たちと一緒に弁当を食べるこいつのほつ  
が、よつぽじ出来た人間だ。

「あ、ねえねえ、金閣寺」

しかし、こいつのこのもの覚えの悪さはさぞかしならないものだ  
ろうか。同世代のやつから親しげに呼び捨てで名前を呼ばれるのは  
嬉しいのだが、それも京都の寺呼ばわりされて嬉しさ半減だ。別に  
いちいち数えてたわけじゃないけど、これまで10回はこいつ俺のこ  
と金閣寺つて呼んでやがる。

「金閣寺じゃねえ。金常時だ」

そう言つて、にらむ（田を向けただけ）と健一は別に大して気に  
した風でもなく「あ、『ごめん』と言つて再び俺の名前を呼んだ。  
「で、金閣寺」

「お前、ごめんの意味分かつてるか？」

しかし、健一はやはり別に大して気にした風もなく「うん」とうなづいた。何か、こいつを見ていたら、名前がどうとかもう大したことないような気がしてきたので、もうスルーしておくことにした。でも、こいつ坂本のことは名前間違えて呼ばないんだよな。確かに、金常時つてのは珍しい苗字ではあるのだが。

「お、おお。何だよ」「金髪君、なにと質問があるんだ? どうしたかな? て

同世代の人間から面と向かって質問なんてされるの初めてだな、  
と内心胸を躍らせながら声を出す俺。しかし、健一の質問はそんな  
俺の高揚感をあつさりとドブ川に突き落とすような代物だった。  
「金閣寺つて、犯罪歴があるってほんと?」

ええええええええ！」

健一の言葉に固まる俺。そして、健一の横で驚きの声を上げる坂本。ちなみに、爆弾発言をかました本人は、悪びれもせず目を丸くしてやがる。

りなんでしょ？」

「今までやられると、もはや否定するのも億劫だ。そもそも、んなことやらかした人間を快く受け入れる高校つて、どれだけ手放しな学校だよ。うちの生徒でウサ晴らしてくださいってか？　しかし、面白おかしくそんな噂を流す連中は置いといて、問題はそんなことを平然と本人の前で口走る健一の奴だな。これが「そんな噂流れてるけど、んなことないよね」ならいいのだが、完璧、こいつ俺の答え待ちだし。そんで、健一と同じく俺の答えを息を呑んで待つてる坂本。お前、俺を見込んで弟子入りしてきたんだよな？　ここは弟子のお前が（弟子と思つてないけど）笑い飛ばして「んなことあるわけない」つていうべきだろ。もし仮に師弟関係が築かれていたら、

お前はこの時点で破門だ。

しかし、いくら待つてみても、一人は何のフォローもせずただ俺の答えを待つ始末。もしここで「イエス」と答えたなら、健一は普通に「ふーん、やつぱりそつなんだ」と納得し、その横で坂本は悲鳴を上げつつの場から逃げ出すに違いない。よくよく考えれば、俺つてやつはことん友達運というものがないらしい。

「……なんことあるわけねえだろ」

沈黙を破つて俺がそう答えると、健一は「え？」 そうなの？ と聞き返してきた。他意はないのだろうから「ああ」と言葉を返す俺。そして「や、そうだよね、僕、金常時君のこと信じてるもの」と明らかに胸を撫で下ろしながら言つてのける坂本にも、悪気はないのだろうが、その由々しさがかなりムカつく。ですが、いじめられっ子だな。

その後、ありもしない噂を否定し、昼食をとり終えたちょうどのとき、坂本が何気なく「ねえ、金常時君」と俺に話しかけてきた。

「なんだ？」

「今朝さ、サナちゃんに会わなかつた？」

「……！」

ど、ど、どつじて坂本がそのことを！ 僕はあんぐりと口をあけつつ、閉じない口を無理やり動かしながら何とか言葉を発した。

「ど、どどど、どして？」

「うん。今朝、サナちゃん僕に金常時君に謝りたいって言つてたから。一応、家の場所は教えてあげたんだけどちゃんと会えたか気になつてね」

そういうえば、こいつ彼女の兄貴（義理の）だつたんだよな……。

と思いつつ、俺は返事を返した。

「お、おう……。会つた……」

「そつか。よかつた。一応、金常時君はそんなこといつまでも根に持つような人じゃないって言つたんだけど、サナちゃん根が真面目だから」

「そ、そか……」

妙に俺のことを知つた風な口を聞く坂本だが、彼女に好印象を与えてるので別にいい。それより、問題は俺だよ俺！ 今朝、彼女にあんな態度とつた拳句、放課後、知らない女からの呼び出しにウキウキ胸を躍らせたりなんかして……！ 浮かれすぎて忘れてたけど、俺にはれつきとした（？）想い人がいるというのに！ し、しかし……呼び出されている以上、無視をするわけにも……いや、しかし……いや……だあ！ 一体俺はどうすりゃいいんだよお！

そういうしているうちに予鈴が鳴り、坂本は教室に戻つていった。そして「どうせだから、もうちょっと寝る」ともう午後の授業に出る気のない健一が、惰眠をむさぼる横で、俺は一人頭を抱えた。放課後、体育館裏に行くべきか。それとも行かざるべきか。

ああ……。俺の中の悪魔が俺の耳元で「いつちゃえよ」とささやいてくる。しかし、俺の中の天使（もちろん早苗）がそれを制止する……。

だあああ！ 一体俺はどうすりゃいいんだよおお！

タイムコミットまで、残り一時間。刻々と、選択のときは迫つていた。

## 第23話・ドキドキの放課後！（その4）

放課後、下校する生徒や部活動に励んでいる生徒を尻目に、俺は人っ子一人いない体育館裏に来ていた。もし、体育館裏などに一人でいるところを誰かに目撃されてもしたら、またよりもしない噂を立てられることは必至だったが、それでも、やはり呼び出される以上シカトするわけにもいかないだろう。そう。別になにも俺に思いを寄せる女の子に会つてみたいとか、それをいいことに、あんなことや、こんなこと……！ なんて期待をしているわけではない。俺はあくまで、こっちにその気はないにしても、相手の気持ちを無視するようなことはしたくなかっただけなのだ。だから、悪魔のささやきにそそのかされたなんてことは……決してない！

それに対して、体育館裏に来てからもうずいぶん経っている。さつき、ケータイで時間を確認したら、すでに30分……。しかし、いくら待つても相手はまだ来ない。もしかすると……。いい加減、そんな考えが俺の頭をよぎっていた。

まさか、これは単なるいたずらだつたとか？ しかし、健一の奴が俺をだましていたとは思えない。どう考へても、あいつはだますよりだまされるタイプの人間だ。

そう。そうだよな。第一、待ち合わせ時間とかも聞いてなかつたし、もうちょっと待つてみよう！ と前向きに考へた直後、いたずらなどという考へが生ぬるく思えてしまう現実が理不尽にも俺の前に立ちはだかつた。

「金常時こらあ！」

体育館裏に唐突に響き渡る怒声。そして、わらわらと人気のないそこを埋め尽くす、ごつい顔の嵐。もう衣替えの季節は終わっているのに、時代に乗り遅れたがごとく、奇抜な改造を施した学ランに身を包んだ、どこからどう見ても「よからず」な人たちが、瞬く間に俺の前に壁を作り出した。その数、後ろのほうは見えないが、

およそ30はくだらない。

「……」

あまりの出来事に、俺は事態がうまく理解できず放心状態に陥つた。

体育館裏。呼び出し。愛の告白。色眼鏡で俺を見ない、心優しい女の子（内氣で美人）とのランデブー。美しい幻想が、またしてもガラス細工の「」とくもろく、いともあつさりと崩れ落ちていく。そして、その崩れ落ちた美しい幻想の残骸を拾い集めて作り直された現実は、ごつい顔、いかつい風貌の人間が競演して奏でる地獄の交響曲……もとい、目を覆いたくなるほど悲惨なものだつた。

「おうおうおう、金常時よお。てめえ、逃げずによく来やがつたなあ、ああ？」

そして、俺の心境を完全無視して、現実は無情にも俺に因縁をつけてくる。眼前にむさいづ男の、高校生とは思えないひげ面野郎の顔が迫つてきて、俺はようやく放心の底なし沼から強制的に引き上げられた。と同時に、それが期待していたものとはあまりにもかけ離れすぎていたので、俺は吐き気を催し、思わずうつむいた。

ちくしょう。なにがどうなつてやがんだよ……。とは思いながらも、じうじう理不尽な不測の事態に慣れているせいか、それほど困惑していられない自分が悲しかつた。

「おうおう、こら。さすがのてめえも、これだけ頭数そろえりやイチコロつてか？」

「黙つてねえで、何とか言つてみるよおー！」

「いまさらびびつてんのか、おうー！」

「何とか言つてみるこらあ！」

眼前で何人ものごつ顔にキヤンキヤンほえられつつも、俺は冷静に今の状況を分析した。まあ、健一の言伝がなあな感じでひん曲がつて俺に伝わつただけのことなのだろうが、でも、あいつ女がどうとか言つてたよな……。つてか、ここにこいつらがいるつてことは、俺のクラスメイトに伝言を頼んだのはこいつらだつたつてこ

とか。そう思いつつ顔を上げると、どいつもこいつも、以前俺に一方的に因縁をつけてきて、逆に返り討ちにした連中ばかりだった。おそらく、直接俺と対峙するのが怖くて、クラスメイトに言伝など頼んだのだろうが、それにしてはこいつらやけに強気だな。とりあえず、面倒<sup>いのて</sup>とは嫌だったので俺はもう一度黙つてうつむくことにした。すると、調子に乗ったゴツヒゲ（たつた今命名）が、俺の髪をつかんで無理やり俺の顔を上げさせた。その醜い顔と至近距離で目が合つて、思わず眉根を寄せた俺を見て、にやりといやらしい笑みを浮かべるゴツヒゲ。しかし、ここは我慢だ、我慢。

「あれれ？ 金常時様ともあらうお方が、まさかマジで俺らなんかにびびつてゐわけじやありませんよね？」

「……別に」

「あ？ なんてつた？ 聞こえねーよ」

そう言つてゴツヒゲが、俺に向けておちゅくるように耳に手を当てた。ポーズを取ると、背後の不良たちからどつと笑い声が沸きあがつた。これには温厚な俺も、さすがにムカついて、俺の髪をつかむゴツヒゲの手首を驚づかんだ。すると、ゴツヒゲは驚いて俺の手を振り払うと、ひるみながら俺から距離を取つた。途端に、示し合わせたように笑い声が止み、場の空気が一気にぴんと張り詰めた。このまま黙つて道を開けてくれそうにはないものの、明らかに不良連中は全員そろつて引け腰だった。それを見て取つた俺は、一番手つ取り早い方法でこの場を切り抜けることにした。

「……おー」

そう言つて、ズボンのポケットに手を突つ込み、大仰にため息をついてみせる。すると、不良たちは各自俺から一步退いた。よし、ここでとどめの一発だ、と俺はゆっくりポケットから出した手を胸元まで持つてくると、バキボキと拳を鳴らして決め台詞を吐いた。

「お前ら、死にたくなかつたら、黙つて道あける！」

一様に青ざめた顔から、不良たちが揃つて息を呑むのが読み取れる。そして、そこで道は開かれ、何のいさかいも起さずこの場を切

り抜けられるはずだつたのだが、ここで予想外の事態が起つた。黙り込み、今まさに開かれようとした不良たちの壁の背後から無遠慮に「あーもう!」となぞの声が割り込んできたのだ。

その声が聞こえた瞬間、俺はそれが空耳であることを心から祈つた。そして、その次には、その声に聞き覚えがあることを全力で否定し、いやな予感を無理やり押しつぶした。しかし……。

「いつまで待たせんのよ!」こつちはわざわざ時間割いてきてやつてんだから、さつさと済ませなさいよ!」

「あ、あねさん。一応こつちにも立場つてものがありますので話が済むまでもう少し待」

「お前らの立場なんか知るか!」

その傍若無人な台詞とともに、「ぎやう!」と不良の一人の悲鳴がとどろき、同時に背後のほうから不良の壁が左右に別れ、一直線に道が開かれた。そして、開いた道の先に立つていたのは、こつい男たちの寄せ集めの中、あまりにもこの場には浮いている、セーラー服に身を包んだ女の子だった。

それが、ただの女の子であつたなら、迷子の子猫ちゃんのようだと形容しても差し支えないのだろう。しかし、そいつを見た瞬間、無理やり押しつぶしたいやな予感が俺の中で吹き上がり、俺の意識は混乱の渦の中へ一気に放り込まれた。ちなみに、その女の子の足元には、不良の一人が悶絶しながらびくびくと痙攣を起こし、地べたにはいつくばつていた。

「な、な、な、な……」

長身に細身の体。それでいて、豊かな胸と引き締まつた腰がかたどる悩ましい曲線美は見事に身に着けたセーラー服の魅力を引き出し、同時に本人の美貌も引き立てている。勝気な性格を現したきゅつと鋭い瞳は、苛立たしげな光を宿していたが、表情を和らげれば、たちどころに、その傍若性は影を潜め、世の男どもはみんなその二面性にだまされる。そう。そこには、傍若無人という言葉が知りたいなら、この女を観察すればいい、と思わず言いたくなる、俺のよ

く知った女が立っていた。

「な……なんで春姉がここにいるんだよお！」

俺の台詞に「えええ！」と不良たちが驚きの声を上げる。まあ、無理もない。しかし、当の春姉は別に驚きも困惑もせずあっけらかんと「あんたこそ、何でこんなところにいんのよ」と返してきた。

「な、何でつて、ここ俺が通つてる高校だろが！」

「え？ あ、そういえば、そうだっけ」

「……てめえの弟が通つてる学校ぐらに覚えとけ」

「なに？ なんか言つた？」

「べ、別に……そ、それよりこんなところでなにしてんだよ…」

「なについて、なんかこいつらが、やたらケンカが強い転校生がいて、自分たちじやどうにもできないからつて助つ人頼まれてさ。ま、私はなんこと興味ないんだけど、助つ人代が破格だつたもんでね」

「……」

やたら強い転校生。助つ人。そして、この状況……。ま、まさか、これって……。

「で？ そのやたらケンカの強い転校生つてのはどいつよ」  
そう言つて、春姉は周りの不良に目配せした。すると、不良たちはいっせいに無言で俺を指差した。

「え？」と間の抜けた声を漏らしてから、俺と目をあわす春姉。

「あ、あははは……」

どうやら、人間気まずい状況ではどうにも笑うしかないらしい。信じられない事態に追い込まれ固まる俺を尻目に、春姉は苦笑いした。なぜか、不良たちも春姉と一緒に苦笑いをしている。なんか、無茶苦茶空氣重てえ……。

「コホン……あー、その……なんといいますか……」

「……」

言葉を濁す春姉を、息を呑んで見守る俺と不良たち。今まさに、俺の命運は目の前の傍若無人な女に握られていた。まるで、生きた心地がしねえ……。と、思つていると、春姉が重い口を開いた。

「い……」

「……？」

「い……いざ！ 尋常に勝負！」

開き直りやがつた、こいつ！

「いや、ちょっと、待てえ！」

「待てないの！ 今月の新作バッグは待っちゃくれないの！」

「てめえには血も涙もねえのか！」

「ふ……もやは問答は埒もなし……言いたいことはその拳で語りなさい、我が弟よ……」

そう言つて、左半身を斜め後ろにずらし、拳を構える春姉。その構えを見ただけで、過去のトラウマがよみがえり、俺は吐き気を催した。不良30人ほどを前にしてもまったく危機感を覚えなかつた俺の体が、急速に身の危険のアラームを鳴らしだす。

ちくしょう。こいつに、血と涙を求めた俺が馬鹿だつた……。こうなれば、もはや残された道はひとつしかない。

「そつちがその気なら……」

体中からいやな汗が噴出す。緊張で呼吸がうまく出来ない。

そして、命がけの姉弟ゲンカの開始の合図のように、けたたましいチャイムの音が校内にこだました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5078a/>

---

虹色の明日へ

2010年10月28日07時01分発行